



《蟬で固めた鳥の羽根 第一話》

夢を見ていた。

それは犯される夢。

アタシが男に犯され、悶えて、泣いて…………感じる夢。

その不快感で目が覚めた。

「…………ん……んう……？」

聞こえてくるチュンチュンと言う鳥の鳴き声。

遠くを走る車？ バイクの音……。

カーテン越しの陽ざし。

どれをとってもいつも通り。

夢の中の不快感を少し引きずりながら身体を起こしてチラッと横を見ると、そこにはアタシの母親がベッドの脇に立っていた。

「あ、ま、真尋ちゃん…………お、おはようございます……❤」

「ん…………はよ」

まだ眠気の降り切っていない頭で返事をしつつ、母親を見る。

アタシのことを真尋、そう呼んだこの人、年齢よりもかなり若く見られるおっとりしたお姉さんって感じ？

長く、緩くウェーブをかけた髪を結んで前に垂らしていて、Cカップそこそこのアタシと違って胸は大きい。

改めて、この人はアタシの母親、ママってやつ？ 高木 千尋（たかぎ ちひろ）って名前、アタシは高木
真尋（たかぎ まひろ）、名前はそっくりっしょ？

そのままは頬を染めて何かを期待しているみたいに娘であるアタシを見てきてる。

まぁ、何を期待しているかなんてわかりきっているんだけどね。

わかった上でアタシはなんにも言わない。肩口でほどで切って、染めた訳でもなく色素が薄くて薄い茶色になっている髪を軽くかきあげて、がしがしと頭を搔いて、ベッドの上で胡坐をかく。

「…………あの……真尋、ちゃん……❤」

「…………」

必死に何かを訴えかけようとしているママの視線はアタシの下腹部、股間、いいや——。

「なに、チンポ欲しい訳？」

「っっっ！ っ……❤」

——チンポに釘付け。アタシ、高木真尋は所謂ふたなりってやつのよね。

女の身体に男のチンコついちゃった、そんな身体をしている。

そのチンポは薄いパジャマの生地を隠せないほどに勃起していて布地をおしあげている。

それをママは欲しくてたまらない……つまり、アタシと実の母親はそーゆー関係。まあ、ママとだけじゃないけどね。

アタシはクスクスと小馬鹿にするようにママを見つめたら、「いつもの」と言う。

その言葉にピクンと反応したママは、今更恥ずかしそうにしてスカートを捲り上げていく。

恥ずかしがるのはスカートをめくることじゃなくて、娘のチンポ欲しがってることのはずなんだけどねー？

なあんて笑ってると、そのママは「いつもの」の準備完了。

捲り上げたスカートの下、本来ならパンツで隠されているあそこなんだけど、ママのそこには黒い革の貞操帯がつけられちゃってる。と、言うかアタシが着けさせてるんだけどねー❤️

「ほら、それで？」

「っ！❤️」

スカートをめくってあそこを、貞操帯を見せつけてくるママだけど、それで終わりじゃないんだよね❤️

ママは、下品にも腰を落として、ガニ股になると少しだけ口をもごもごさせてから——。

「……！ っ、じ、実の娘の、チンポ様に支配されているっ、は、は、恥知らずのっ……母親のおまんこに、

お、お慈悲を……❤️」

「ふつ♪ ふふ、あはははは…………ばっかみたい❤️」

「い、言わないで……！」

——さいっていのセリフを吐いてくれちゃった❤

実の娘、お腹痛めて産んだはずの娘に、アタシのチンポが欲しくて、おまんこ管理までされちゃっている情

けないママ ❤

恥ずかしがりながらも今もアタシのチンポを、ズボン越しの膨らみをチラチラ見てきてマジキモい。

その姿を笑ってあげたら、アタシは枕元から鍵の束をジャラッ★と取り出す。それらは全て貞操帯のカギ

❤ アタシが管理しているメスたちのものなの。

その中の一本、「ママ ❤」って書いてあるカギを持つと、ガニ股で待機しているママに近寄って行って、そのカギで首元を”つー”っとなぞっちゃう ❤

「ひやうっ……ま、真尋、ちゃんっ……お願い、も、もう、我慢っ…… ❤」

「えー、もう限界なの？ まだ一週間しか経ってないじゃないの？」

カギで首筋を撫でられただけなのに、腰をカクカクさせて、身体を震わせる姿は本当に母親と言うかメス？

こんなのから産れたと思うと情けなくなっちゃうけど、ま、アタシも似たようなもんだよね……。

自嘲気味に小さく笑うと、爽やかな朝の空気をメス色の染め上げるママの匂いに少しアタシのチンポも反応しちゃう。

一週間貞操帶着けっぱなしのママ、着けたままオシッコも大きいほうも出来るし、通気性も良いから不便はそんなに少ないはずだけど、おまんこは完全に塞がっちゃってる。

そうなると、この淫乱で変態なママちゃんは我慢できないし、アタシのチンポにハマっちゃっているママは欲しくてたまんないみたい。

必死に腰をヘコヘコ振って、無様にハメ乞いする姿は面白いんだけど、それ見るともっと意地悪したくなっちゃう❤

「まだ、だあめ……❤ ママはもっともっともーっと❤ まともに会話も出来ないくらいアタシのチンポ欲しがるまでお預け、ね？」

「ひっ、そ、そんな、ああ……！ も、もう、ほんと、我慢辛いのっ、真尋ちゃんっ！ お願いだから……！」

「あーもー、ひつつかないの……」

お預けを告げるとママは懇願するようにアタシの足に縋りついてくる。

あまりにもプライド0な姿は楽しいけど、もっともっと惨めになれるはず、なんてことでお預け継続決定で

ござります❤

縋りつくママのおまんこを貞操帯越しにグリグリしてあげると、それだけで「もっと❤ お願い、もつと！」なんて媚びてくるから、少し踏んで上げてからご飯。

テレビでは色々な政治やら、不倫やら、観光地の話、この近くのレイプ事件、どっかの国の殺人なんかが流れていた。

それらをボーっと吸収したら、最後までおねだりしてきたママの股間をまた踏んで、制服に着替えて登校開始。

時期的に白の半そでワイシャツに赤いネクタイ、舌は紺のスカート、それに黒のソックスって感じ。

アタシは割と有名なお嬢様学校の通っている。

家はそんなに裕福ってわけでもない、パパもいない母子家庭だし。でも、まー、困るほど貧乏でもない、母子家庭の割には裕福だと思う。

そんなアタシは結構勉強が出来たり、色々あったりして学費免除枠でお嬢様の仲間入り。最初は馴染めるか

不安だったけど今は結構みんな仲良し❤️ なんだよね。

口元に小さく笑みを浮かべたら、アタシは電車に乗るために駅に向かう。

学校までは電車で一本、そこから歩いて少々って位置にある。

もう慣れた電車、そんなに都会でもないので満員とは言えない、そこそこほどの込み具合の車内。

電車に乗ったら、アタシが着ている制服と同じものを発見、ネクタイが青だから後輩、かな？

青いネクタイの制服女子が三人、一人がアタシに気づいて残りの二人も気づいて頬を赤くしつつこっちをチラチラ見てくる……かわい。

その反応を見て、その娘たちがアタシの「玩具」だと判断してゆっくり近づいていく。

正直玩具はあり過ぎて正確にどの子がどうかって記憶はないんだけど、一応判別法はある——。

「ん……」

「あ……ま、真尋、センパイ……❤️」

——三人のうちの一人の頬に手を当てるようにして髪の毛を少しかきあげて耳に触れる。

左耳の耳たぶ、そこにシークレットピアス、樹脂製の透明な、ピアスをしてないときにもつけておいて、穴

が塞がらないようにするためにものがあるのを確認。

そう、アタシは自分の玩具全員の左耳のみにピアスの穴を開けさせていて、それで玩具の判別をしているのだ。

結構良い方法だと思うんだよね？ なんて誰に言うでもなく自画自賛して、その場にいる三人が玩具の後輩ちゃんであることを確認したら、とりあえず今耳触っている娘に——。

「ね……アタシ、朝のお掃除まだなんだ……… ❤ キレイにしてくれるよね？」

——にっこりと微笑みかけながらお願い？ ううん、命令 ❤ しちゃう。

アタシの言葉に頬を赤らめていた三人は、それぞれ動き出す、命令を受けた一人以外の二人はアタシを隠す様に壁になっていく。

車両の隅にいるから、二人が壁になればある程度ガードになるから十分！ 注目されても女の子が集まつて何かしてるように見えるでしょーし。

二人がガードしたら、耳を触ってたその一人は顔を本気で真っ赤にしながら、震えつつ電車の床に膝をついた。

ぶっちゃけ名前も、この娘をどんな風に遊んだかもわからないんだけど、そんな娘にアタシは朝のお掃除命令。

寝汗も落として来てない汗臭い、ナニを ❤

「……………っ、し、失礼、しま、す…… ❤」

「ん……」

緊張してる感じたっぷり、育ち良さそうな雰囲気が良い感じ。

学校の女の子ってほとんどお嬢様だし、育ちの良い、品が良い娘ばかりだから玩具にするの楽しいんだよねー。

この娘だって、アタシに玩具にされる前は白馬の王子様とか信じてるような女の子だったのかも……どんな経緯で玩具にしたかも覚えてないんどね？

女の子は震えながら、アタシのスカートをめくり上げて、一瞬だけ躊躇ってからチンポを取り出した。

「は、わ……おっき……い……❤」

お嬢様でも所詮はメス？ チンポを見て生唾飲んで、目を潤ませちゃってる❤

ゴクリって音が聞こえてくるほどで、電車のガタンゴトンって軋む音で誤魔化せるか不安になっちゃう。

女の子が取り出したアタシのチンポ、ママが欲しがってたまらなかった、太くてかたーいチンポ❤ 仮性

包茎よりで、ギリギリカリ首隠すくらい皮被りで、そこに凄く汚れが溜まるタイプなんだよね、アタシ❤

「っ、っ！ あ、凄い……臭い……！」

しゃがんだ娘はお掃除をしようとアタシのチンポの皮を剥いたんだけど、そうなると皮の下、カリ首に溜まっているチンカスとご対面❤

ほんっと溜まりやすくて、一晩で軽くついちゃうんだよね、アタシのチンポ❤ 白い、垢、恥垢って書い

てチンカス❤

それを前に女の子は一瞬顔をしかめるけど、直ぐに震えながら舌を伸ばしてくる。

「れる……❤ ちゅ❤ れる、れろお❤ れるる❤ んつ……くさあ……❤」

「結構上手いじゃん……朝初めてだっけ？」

「あ、は、はい、朝は初めて、です……❤」

震える舌がアタシのチンポに触れてカリ首をゆっくり舐めていく。

そこに付着したチンカスをが舌で、ゆっくりゆっくりと舐めとられていく感覚は結構気持ち良い❤

プルプルで柔らかい舌、将来彼氏なり旦那さんとキスするお口だろうけど、今はアタシのチンカス掃除機、

たまんない❤

首の角度を変えて必死に舐めてくる姿がなんかカワイイ、色々な角度からカリ首を舐めてチンカスを舐め

とる可愛い後輩ちゃん❤

名前も思い出せないけどイイじゃん！ 少しテンションをあげながら、チンポを震わせてカウパーを垂らしていく。

「れろっ❤ ちゅ❤ ん……れるう❤ んん……❤」

「ね、チンカス、おいし？ 必死に舐めてるけど❤」

「え？ あ…………その、ち、チンカスは……」

ペロペロ音を立てて、電車の中でチンカスお掃除をするお嬢様❤️ ご両親に愛されて大切に育てられてきた育ちの良い女の子をこんな風に使うって最高❤️

その娘にチンカス美味しい？なんて、普通に考えて美味しいはずがないものの味の感想を確認。

困ったようにやや幼い顔を曇らせる彼女だけど、カリ首をれろん❤️と舐めてから口を開いた。

「ち、チンカス自体は美味しいくない、です……けど、ま、真尋センパイのは、その、美味しいと言いますか…………う、うれ、嬉しい、です……❤️」

「ふうん……❤️」

チンカスは美味しいけど、アタシのだから喜んで舐められる、だってー❤️ 可愛いこと言ってくれるじゃん、名前も知らない後輩！

褒めてあげる意味で、頭を撫でてあげたらその手で自分の、地毛だけど薄い茶色のセミロング程度の髪をかきあげる。

「ちゅっ❤️ ん……う……❤️ れるれる❤️ つ❤️」

「綺麗になったけど、しばらくしゃぶって？ キミの口のなかきもちい❤️」

「 ふあい んじゅちゅう」

チンカスは量も少なかったし綺麗になくなったみたい、まだお掃除テクニックはそこそこだけど、この娘の
お口の中あったかくて気持ち良いから、降りるまでチンポケース扱いしちゃう。

咥えさせたままアタシはスマホを確認して、入ってきている玩具からの連絡やら何やらをチェック、ついで
にエロ写メだらけのカメラロールをチェックしていたら——。

「あ……」

「んう？ どうか、ひまひたか？ じゅる」

「ん、なんでもなーい」

——今しゃぶっている女の子の写メ発見、学校のトイレでエッチしている写真、そこで処女奪ってあげた
ことをなんとなく思い出したけど、結局名前は出て来ない。

出て来ないものを探す気もなくて、頭を撫でてあげたらそのまま降りるまでしゃぶらせておく。

そして、最後にチンポを綺麗に舐めて、ウェットティッシュで拭かせたら三人にそれぞれ左耳、ピアス穴を
確認するようにキスをしたら電車を降りた。

降りると、他の車両にもいたような制服の女の子たちがチラホラ。

お嬢様学校だから大部分は学校まで送迎がデフォだけど、電車組も割といる。

そんな彼女たちに混じって学校まで向かっていった。

.....。

.....。

.....。

「——ニュースでもやっていたかも知れませんけれど、性犯罪者がこの地区の近くで出没しています、十分注意してください」

「.....ふあ.....」

朝のホームルーム中、教卓では眼鏡をかけた、「いかにも」な真面目そうな先生が連絡事項に混じって、レイプ犯に注意なんて言っているけど、それより立ち悪いのがここにいるのを知ってるくせにー。

なあんて欠伸を一つして周りを見回す。

言ったようにここは名門お嬢様学校、だからって訳じゃないかもだけど可愛いのが多い、だからこそお嬢様のプレミアム感と合わさって巷じゃ「姫様学校」なんて呼ばれてるみたいだけど、アタシからしたらここはオナホ置き場って感じ？

現に今も——。

「っ❤ つあ❤ んんんっ❤ こんな、っ❤ んう.....❤」

「ちょっと、感じすぎ感じすぎだって.....❤」

——一番後ろの席にいるアタシは、椅子に座ったままオナホでオナニー、もといセックス中❤

一応ゴムしてハメてる相手はこのクラスの委員長で、風紀委員もやっている真面目な女の子、黒髪清楚な吉

野 圭（よしの けい）ちゃん❤

お気にのオナホ扱いの彼女のおまんこにチンポを入れて椅子に座っての座位ってやつ？ 彼女は前かがみに机に上半身倒して感じるのを必死に我慢して指を噛んでる。

そんな異常な光景を誰も止めない、先生までも❤

全員が顔を赤くして目を逸らすか、チラチラ見てきて、本当にここにはお嬢様なんていなくてメスオナホばっかりって感じで面白いんだよね❤

「んっ❤ ここ、弱いよね……？」

「！？ っ❤ や、やめっ……声っ❤ ひいいいっ❤」

軽い出し入れだけでも感じてた圭ちゃんのおまんこ、そこを更に感じさせようと角度を変えて深く突いてあげる。

奥付近のコリコリしたポイントをグリグリしてあげると、それだけで彼女は悲鳴みたいな喘ぎ声出いで、一瞬クラスが静寂に包まれる。

「あっ……！」

圭ちゃんはそれに気が付いて恥ずかしいのか、感じちゃってるのかおまんこ強く締め付けて来てカワイイ

❤

それを更に鳴かせて恥ずかしがらせちゃって、小刻みにピストンして、椅子と机を擦って刺激❤

「ひつあ ❤ やめっえ ❤ んんっ ❤ んっ！」

声を我慢しようと腕で口を押えてるみたいだけど、ぜんっぜん我慢できてないのがマジかわ❤

具合も良いし、このオナホしゅきー★なんて思いながらどんどん腰の動きを早くしていって——。

「っ……出す、よっ、締めて、アタシのチンポ、もっとっ ❤ もっとっ……！」

「っはっあ、いつ…… ❤ っくっあ ❤ イクっ……イクっ…… ❤ 」

——HRの最中にゴムの中にたっぷり射精❤

射精に合わせてイクあたり圭ちゃんの肉便器の感が凄くて興奮してきちゃう ❤

ゴムの中にたっぷり出してあげると、圭ちゃんはそのままグデーって机に倒れ込む。

まだチンポ入ったままなのに、腰をピクピクさせて、汗ばんだ額に髪を張り付けてるのがエッチー ❤

アタシはそのまましばらくチンポ入れたままにして、圭ちゃんが起きれるようになったら引き抜いてゴムは彼女に。

そして、汚れたチンポは隣の席のフェラが上手い娘に舐めさせて綺麗にピカピカ ❤

これがアタシの学校生活の一部、だけど大体こんな感じ。

色々な意味で順風満帆ってやつかも知れない、過去には色々あったけど今は割と幸せ…………のはずなん

だけど……ね。

「じゅる❤️ んちゅ❤️ んんう……まーちゃん、どうかしましたあ？ 私、下手でした？」

「ん？ なーんも、きもちーからそのまままま❤️」

チンポをピカピカにさせた後は、クラス一の巨乳、おっとりエッチな麻依ちゃんにおしゃぶりして貰ってる。

柔らかくて妙に粘っこい舌が気持ち良くて、よくして貰ってるの❤️

根元からゆっくり舐めてくる、なんか、言ったら失礼だけど大きくて柔らかいナメクジが這ってるようなのが割と癖になる……。

そんなフェラを楽しみながら、「あ、スクエア発売じゃん、ワートリ読まなきゃ」なんて、漫画のこと考えちゃってた。



蠟で固めた鳥の羽根

第二話

《蟬で固めた鳥の羽根 第二話》

子供のころ、アタシは虐められていた。

まあ、ふたなりだったしね、クラスの女子を中心に男子にも。というかほぼ全員に？

ことあるごとに服脱がされて、チンポ弄られた。

定規で叩かれた、輪ゴムで撃たれた、もちろんあそこ、まんこだって好き勝手された。

アタシの初体験ってクラスで虐められてた男子だったんだ、アタシとセックスしろ何て言われて、みんなの見ている前で犯された。

それっからは男子もセックスしだして、その当時のクラスの男子全員の童貞を卒業させた。

それもあってか女子らの虐めは激しくなった、かな？

チンポ思いきり踏まれたことあったし、タバスコ垂らされたりしたこともあるし、酷い扱いで、何度も死のうかと思った。

だけど、ある時に、なんかもうどうでも良くなって反撃したときに気が付いたんだ。

アタシって強い。

そのことに。

ふたなりは女と男の遺伝子を併せ持つて、あたしは女7の男3くらいだったんだけど、女の発育の速さと、

男の筋力のバランスがちょうど良いタイミング、だったのかな？

今は別にむちゃくちゃ強い訳でもないけど、男の筋力が混じってる分普通の女の子よりは強い、程度に収まってる。

ま、あの時は何より「もうどうなっても良いや」って気持ちが強くて、男子のリーダー格を思いきり殴って、

蹴って、前歯を叩き折ってやった。

それに驚いて怯えている、アタシを組み敷いて犯した男子、小便飲ませた男子、チンポを毎日蹴る女子、便器を舐めさせた女子、片っ端から殴って、殴って、殴って、その日からアタシがそのクラスのトップになつた。

奴隸から王に一気にクラスチェンジして、アタシを虐めた女子全員を犯した。

男子に負けないようにトレーニングを始めた、もし逆襲に遭ったときに負けないように。

そんなことを繰り返して成長して今に至る訳で——。

「ん～……ポチい、絵面が面白くない、もっと過激なことやんないと 10万円たまんないよー？」

「そん、な、真尋さま、これ以上は……つい❤ ……！」

——あるお嬢様学校の支配者？ みたいになっちゃたアタシは今、その当時の虐めの主犯だった女子の
石井 紀子（いしい のりこ）ことポチちゃん『で』遊んでいるところ。

薄い茶色の髪をかきあげながら、アタシはスマホ片手にポチちゃんを見てケラケラ笑っていく。

アタシは学校のトイレに持ち込んだ椅子に座りながら楽しんでいて、クラスの女子がノート P Cに繋いだ
カメラを構えてポチちゃんを撮影したりしている。

そのポチちゃんは、首輪をして顔には自分がはいてたパンツを変態仮面？ よろしく被らせてあとは上履
きと靴下以外は全裸❤

割と大きい胸、Dカップくらいある胸……その乳首には金のバーベルピアスが光る、肌は綺麗にミルクチョ
コレート色の黒ギャルスタイルなのがポチちゃん❤

髪もオレンジゴールドのツインテにしてあって、かなり目立つ感じ、一応お嬢様学校のここだと黒ギャルスタイルのファッションはアウトにもほどがあるんだけど、そこは、ほら、アタシの色々で押し通して許可させちゃってる。

アタシを虐めてた主犯の彼女は、特に徹底的に遊んであげていて、エロ系動画配信者として活躍させたりしていた。

もう、動画も何本も上げさせていて、今日は生配信で、投げ銭して貰おうって遊びを学校のトイレでやってる。

投げ銭が10万円になるまで延々恥を晒すという遊びを楽しんでいるんだけど……あ、もちろんポチちゃんも楽しんでるかんね？

ポチは徹底的に、念入りに、復讐した後に特に力を込めて虐めてあげた。

こいつの暇潰してアタシへの虐めは始まったようなもんだし、その復讐はきっちりやって、女の子を感じさせるテクニックはほとんどポチで実験したものばっかり。

結構可愛かったから暇さえあれば犯して、弄んで、色々恥ずかしいことをさせまくった結果、ポチはドMの変態になっちゃったって感じ？

今も、沢山の人に配信を見られているのに頬を赤らめて腰をくねらせちゃってる、超変態さんなポチちゃん。もう何回も動画配信させたり、エロネタ系の動画を投稿しているからネットの一部だと結構有名になっちゃってるんだよ？

『ド変態ギャル』だったり『脳みそ空っぽマゾ女』とか『シコれるけど付き合いたくない変態』とかねー。今も配信を見ている人たちから「もっと激しくオナニーしてみせろ」「また便器舐めしなよ」「今日は露出はなし？」なんて色々な過去にやった変態行為への期待がコメントとして寄せられている。

それを見ながら何をさせようかなと思っていて、配信の為に用意した玩具箱、バイブやらが詰まっているそ

こをあさって取り出したのは、底面に吸盤のついているディルドー。

「ポッチー❤️ これっ❤️」

「えっ？ あ…………❤️ ありがとうございます ❤️」

それをポチちゃんに向かって放り投げてあげる。

普通に床に落ちたそれを彼女は嬉しそうに拾い上げて「チンポだあ ❤️」なんて笑っていたりと、ちょっとやばい。

ポチちゃんはそのディルドーをしばらく撫でまわしたら、それを少し考えたからトイレの壁に設置した。

吸盤がついている為に、どこへでも取り付けられるそれ、それを壁に貼り付けさせると、パンツを被った黒ギャルのポチちゃんは、アタシより大きめの柔らかいおっぱい、ピアスつきのそれをぽいん❤️と揺らして軽く跳ねたらカメラ目線になる。

撮影係の女の子も、ポチちゃんがやることをしっかりと撮影しようと近づいていった。

「えーっとお ❤️ ご主人様からオチンポをいただいたのでえ ❤️ 今からおトイレとせっくしゅ ❤️ しまーす ❤️ たっぷりお尻振ってチョーお下品なのするので投げ銭たっぷりたのみまーす ❤️ えっへへ ❤️
これおっきー ❤️」

ポチちゃんは相変わらずのノリノリ、接続してあるパソコンを確認すると視聴者は3000人以上、それだけの人の見られているのに嬉しそうに恥を晒す精神はちょっと尊敬？

半ば呆れつつ、スマホをいじいじして、片手間にポチちゃんを見ていく。

彼女は便所の床に膝をついてまずは、壁に取り付けたディルドーを「じゅぱじゅぱ❤」舐めて濡らしていく。

唾液をまぶしてしっかりと濡らしたら、カメラに、アタシに視線を向けてカワイイ笑顔見せながらディルドーに向かってお尻を突き出していく。

「ん……少し、高かった、かも？　んにっ…………！」

ピースサインしながら、自分でお尻を動かしてディルドーを咥え込もうとしている姿は惨めで、無様でめっちゃ可愛い❤

視聴者のコメントにも『自分から咥え込むとか終わってる』『こんな下品な女いるんだな』『おっぱいプルンプルンでえっろ』なんてのがある。

更に、アタシの周り、撮影の準備とかしてくれた女の子たちからも「惨め」なんてクスクス笑う声が聞こえてて、ポチちゃんは完全に見世物状態。

そのまま、やや高い位置に取り付けたディルドーを挿入しようと必死にお尻を上下、くいくい❤　フリフリしていって——。

「んんにいっ……もす、すこしつ……」

"にゅるっじゅっぷう❤"

「ひにゃああああ❤️❤️❤️ はいひやあ❤️ え、えへへへ★ おトイレと、せっくしゅせーこー？」

——ディルドーを咥え込んでた。

いきおいよくおまんこに入れたから、気持ち良くて甘い声を漏らすポチちゃん、その無様さに視聴者も興奮してお金をかなり投げ込んでいる。

アタシも面白くてついつい笑っちゃうと、ポチちゃんはそれに、アタシに笑って貰えたことに笑顔になると、もっとやる気になったのかお尻を自分からグイグイ振っていく。

「っ❤️ あっ❤️ おトイレとのせっくしゅっ❤️ いいっ❤️ ふぎっ❤️ お便所さまのチンポ、しゅきいっ❤️」

「…………ばっかみたい❤️」

カメラに向かってピースしたまま、片手を膝につくような前傾姿勢でディルドーをおまんこでずっぽり❤️

エッチな音をトイレに響かせてのスケベな便所セックス、その無様ささいこー❤️

過去にアタシを散々虐めてた石井紀子ちゃんはどこにもいなくて、今いるのは最低お下品女のポチちゃん。

よっぽど気持ち良いのか、だんだんと口数も少なくなつていって感じることに精一杯になってる。

ピースの指もだんだん曲がってきていて、「あ、やっぱ、やっぱ❤️」なんて呟きが漏れてるからイク寸前みたい？

「……ん、あ」

このまま無様な姿を見て居ようかと思ったけど、チラ見すれば投げ銭はもう11万円超えてた目標を余裕でオーバーしたのを見て、あとはもう任せていっか？って気分になつたので、その場の女の子たちに声をかけてからトイレを出る。

「……よくよく考えるとうら若き乙女がずっとトイレにいるのもどーなんだろ？」

トイレのドアを閉めながら臭いとかついてないよね？と制服と、薄茶色のセミロングの髪をクンクン嗅いでいたら、目の前に人影があることに気が付いた。

「あ……真紀せんせじゃないですかー、どうしました？」

「高木さん、今は授業中だってわかってるの？…………トイレの中で何をしていたの？」

いたのは、ショートの黒髪、キリリっとしたきつい目つきの、倉持真紀せんせー、35歳とか36歳、だつたかな？

指導主任のきつつい先生で、背が高くておっぱいそこそこ、でもお尻はおっきー❤️ そんな真紀せんせーがアタシのことをきつい目つきで見てくる。

確かに、真紀せんせーが言うように今は普通に授業中、そんでトイレの中ではエロ配信中なんて状況なわけで、どう考えてもまともな状況じゃない。

こんなのを指導主任の先生に目撃されたら即日退学でもおかしくないんだけど——。

「何って、いつも通りのこと、ですけど？ 真紀せんせーも知ってるくせに……❤」

——アタシはそっと背の高いせんせーの左耳に手を伸ばす。そこにある玩具の証、シークレットピアスにそっと触れた。

そう、このきつつい性格の指導主任の先生すら、アタシのペット。

触られた真紀せんせーは美人だけど、その目つきが鋭い顔を一気に赤くしてピクンと震えている。

35歳にもなって独身、しかも初体験はアタシ❤ そんな真紀せんせーはもう逆らえないの。

「そういえば……何日目でしたっけ？」

ふと思い出して、ポケットから鍵束を取り出して見せる。

ママ含めて何人かの玩具につけさせている貞操帯の鍵束、真紀せんせーにもつけてたよね？と思ってその中の一本を取り出して見せちゃう。

そのカギで、せんせーの首筋を一つ❤てなぞるだけで、敏感な欲求不満のおばさんはビクビクしちゃつててかわいー❤

「…………4日目、よ……だから、その…………❤」

震えて、感じちゃいながらねだるような視線を向けてくる真紀せんせー❤

きっと、したくてしたくて、アタシのチンポが欲しくてたまらない状態になっちゃってる。

それを考えると興奮してくるし、かなりムラムラしちゃう。

カギを一旦しまうと、真紀せんせーのむっちりしたお尻、ピチピチパンツスーツに無理矢理詰め込んだようなそこを撫でて「じゃ、人気のない場所、いこっか？」なんてお誘い。

今は授業中、そう言ってた本人はアタシの言葉に逆らいもしないで小さく頷いて見せてた。

……。

…………。

「ほ、本当にここで、するの？　だって、ここ……」

「大丈夫だいじょーぶって、真紀せんせーも知ってるでしょ？　この主もアタシの玩具だって」

「それは、そうだけど…………」

真紀せんせーを連れてやってきたのは理事長室、この学校で一番エライ人のお部屋。

その部屋、その部屋の主ですらアタシのペットである以上、ある意味この学校で一番偉いのはアタシってこと？

なんて思いながら、緊張している真紀せんせーに「イイから脱いで？　帰っちゃうよ？」なんて言う。

それを言われた真紀せんせーは一瞬震えて、その服、格好良いスーツを脱いでいく。

チラチラと理事長室の入り口を確認しながら脱いでいくと、細身なんだけど下半身むっちりのすっこいエロい身体がお披露目。

おっぱいはそんなにないのに、太もも、お尻だけはムチムチっている熟れた女の下品な身体ってエロいよね

❤

それに、真面目で厳しいって有名なせんせーがアタシの命令一つで全裸になって、その股間につけた貞操帯を見せてくるんだから最高❤

「それじゃ、外してあげる……あ、脇ちゃんと剃ってないんだ」

「っ……あ、あなたがこのほうが良いっていうからっ……！」

近づいて、貞操帯のカギを外そうとして気づいたけど、真紀せんせーの脇はもっさり❤

アタシがふざけていったムダ毛処理の禁止をしっかり守っているところも可愛くて加点！

素直な良い娘は好きってね。

カギを回して、貞操帯を開放して外すとその下ももちろんムダ毛もっさりで、かつ臭いがすごい❤

「あー、なにこれ、目に染まる❤」

「っ！ か、嗅がないで！ だって、これつけてると上手く洗えなくて……！」

「ふふ、だよね……❤」

顔真っ赤にして恥ずかしがる真紀せんせー可愛い❤

ペロリと舌なめずりしたら、アタシもあんまり時間ないしと、パンツを脱いで、スカートをまくってチンポ

を見せつける。

ポチのエロ配信で興奮した分と、真紀せんせーのエロさで興奮してチンポはばっきばき❤ カウパーを垂らしてそれを見せつけてあげる。

「生で良いですよね、せんせえ❤」

「……ピル、飲んでるから、問題ないわ…………❤」

せんせーの言葉ににっこり。

真紀せんせーはセックス、アタシとの生ハメの為だけにピル飲んでる悪いせんせー❤

完全にセックスを楽しむ気満々のスケベさはカワイイ。高齢処女を落とすとこうなっちゃうんだよねー、と笑ったらチンポを揺らした。

せんせーは理事長の机に手をついて、ややガニ股になるとアタシのチンポを入れやすい位置を調整してデカケツを突き出してきた。

その、同年代の玩具たちとは違う圧巻のデカケツに感心しつつ、軽く撫でたら、既にやる気満々のおまんこにチンポを押し当てた。

そして、そのまま挿入しようとして、さっきのポチを思い出して命令❤

「ね、自分で入れてよ❤」

「じ、自分で？ ……………っ❤ こ、こう、かしら？」

アタシの命令に一瞬面食らったみたいだけど、真紀せんせーはしっかり実行❤

大きなお尻を突き出してきて、そのムダ毛たっぷり、ケツ毛まで生えてるムチムチの下半身でアタシの、生徒のチンポを——。

"にゅるう❤"

「ひあっ❤ つお❤ おおおお` お` ❤」

「っ❤ げっひん★」

———ゆっくりとい咥え込んだ❤

自分からチンポを咥え込むせんせー、そして下品な鳴き声にアタシも興奮ってきて、お尻を掴むようにして腰を打ち付けていく。

「あー、もー❤ 自分からチンポ咥え込むおばさんとかセックスアピール高すぎっ❤」

「あっ❤ あ❤ あお` ❤ おおお` ❤」

「もう人間語忘れてるのもっ、カワイイっ❤ んっ❤」

”ぱんぱんぱんぱん❤”

”ぬっぶぬほ❤”

肉と肉とがぶつかり合う音と、そしてエッチな水音。

濃いめのマン汁はローションみたいで、めっちゃ熱くて気持ち良い。

髪を揺らして腰を振って、ブラの中で自分の乳首が擦れる気持ち良さも感じつつ、せんせーのおまんこを堪

能❤

もちろん、アタシが気持ち良くなるだけじゃなくて——。

「っ❤ ほら、ここっ❤ 真紀せんせーの弱点っ❤ 生徒におまんこ把握されてるってっ❤ どうなん！？」

「おおおお❤ き、ぐいもちいい❤」

「っ❤ だからっ！ 人間やめるの早いって！」

——腰の角度を変えて、せんせーの濡れ切ったおまんこの良いところ狙いで腰を振る。

真紀せんせーのは奥の背中側、そこをチンポで擦ってあげると簡単に人間やめちゃう。

もう理事長の机に顔を押し付けるようにして涎垂らして、おまんこから溢れた汁で足首まで濡らしてる。

そんな下品なせんせーのおまんこがあっさりイキそうになってるのを察して腰の動きを速めてイク。

”ぱんっぱんぱんぱんぱんっ！”

”ぬるっふじゅふじゅっふ❤”

「おっおお お❤ いぐっ❤ お❤ おお° ❤ おひ❤」

「一緒に、イってあげる、からっ❤ 中出し、するからねっ❤」

エロい音を立てて、昼間の学校、しかも授業中に先生を犯す興奮。

何度も何度も腰を打ち付けて、そしてせんせーのイクタイミングに合わせて強めにピストンしたら——。

「っ❤」

「つつ❤❤ あ❤ いくく❤ いぐ❤ ああああ❤ おへええええ❤❤」

”びゅるっ！ びゅるるるるう❤”

——射精して、せんせーの子宮にたっぷりぶっかけちゃう。

濃いめの精液を吐き出して、一息ついたらチンポを引き抜く。

真紀せんせーは感じすぎちゃってるみたいで、床に崩れ落ちるとお尻を高くあげてプルプル震えっぱなし

だった。

おまんこからマン汁とザーメン垂らして、厳しい指導主任の顔を台無しのアヘ顔をしていて、クスクス笑っちゃう。

「と……そろそろ……ん？」

ひと段落して、応接用のソファーに座ったところであることに、部屋のドアが開いていることに気づいて――。

……。

…………。

「っ……ん……あ……」

「あ、真紀せんせー起きたー？」

「え、ええ、なんとか…………え？」

―――しばらくして真紀せんせーが目を覚ました。

流石に理性は取り戻してるっぽいところに安心しつつ声をかけて、彼女はこっちを振り返って目をポカンとしていた。

アタシ、というかアタシの足の間に膝をついて座る人を見て。

「理事長っ……！」

「じゅるじゅちゅう❤️ じゅるるる❤️ っぷは……く、倉持、先生……」

「あはは、この部屋おばさんばっかり❤️」

ソファに座ったアタシのチンポを舐めて綺麗にしているのはこの部屋の主の理事長。娘が生徒会長やっててそれもアタシのペットのペット母娘の母親って感じ？

二人ともお互いペットなのは知っているけど、こうやって学校でペットとして会うのは恥ずかしいみたい？

でも、二人ともメスの匂いぶんぶんさせて、まだやる気満々って感じでお開きにする気はないみたい。

若い子ばっかり相手してるし、たまにはこんなのもありかなー？ なんて思いながら、おばさん二人を前にチンポをまたゆっくり固くしていく。

「じゃ、次はどっちから？」



朝で固めた鳥の羽根
第二話

《蟬で固めた鳥の羽根 第三話》

「それじゃ、今週の売上は一、お、すごー、会長またトップじゃん❤ これで三週連続？ はい、拍手ー」

「は、はいっ！ 真尋ちゃんに……ほ、褒めて欲しくて…………！」

今日アタシは、カラオケのパーティルームに来ていた。

制服姿で、薄茶色のセミロングの髪を軽くかきあげながら、テーブルの上に置かれたお金を数えて記録している。

今アタシがやっているのは援交の売上発表会ってやつ、玩具たちにやらせている援交、お金稼ぎを毎週決算してるので。

パーティルームの広いカラオケボックスを借りて、アタシはポチこと石井紀子ちゃん、黒ギャルの見た目したDカップ❤ ほんで金髪ツインテの彼女の背中に不安定だけど座ってる。

座りながら、差し出されたお金と、ズルしていないか、客と合った回数とかを照らし合わせ中。

アタシたちの住む町を覗いて、その周辺の街、場合によっては県外でも援交をさせていて、全部で今は18人が毎週毎週やっちゃってる❤

どの娘もお嬢様学校の通うお嬢様なのに、全身が「アタシに褒められたくて」必死になって身体を売ってるんだから笑えるよね？

その中で一位となったのは会長、アタシたちの通う学校の生徒会長をやっていて理事長の娘、一個上の先輩ちゃん

小柄で童顔、ボブカットが妙に似合ってるロリ系なのに、おっぱいはEカップあるエロい女の子。母親の理事長ともどもアタシの玩具やってる。

その彼女、真面目で優しく、可憐で素敵、そんな生徒会長だけど——。

「一週間で8人、計32万円……ほんとすごい❤」

「え、えへへ…………❤」

——4万円での援助交際を8回もして、かなりの額を稼いできてる。

毎日一人以上の男とエッチするのが、ちっちゃくて可愛い会長さんっていうのが結構グッとくるんだよね~。

しかも、アタシに貢ぐために、アタシに褒めて欲しくってのがカワイイ。

それは、今ここに集まっている援交部隊の全員がそうなんだけどね？

褒められてる会長さんを見て羨ましそうにしているし、二位の委員長、吉野圭ちゃんなんか真面目そうな顔に悔しそうな表情浮かべてる。

全員が全員、アタシに褒められたがっている、それを知りながら会長ちゃんを呼び寄せる。

「おいでー？」

両手を広げて、ポチの背中からお尻をあげる。

椅子になってたポチは切なそうな声をあげるけど無視して、小柄な会長ちゃんを抱きしめる。

「今回もめっちゃくちゃ頑張ってくれてありがと❤ 会長ちゃんがアタシの為に頑張ってくれるのほんと

嬉しいんだよ？」

「は、はうう……❤️ ああ、あり、ありがとうございますっ❤️ 真尋ちゃんの為なら、私、なんでも、なんでもできますっ！」

「❤️ ……ありがと❤️ 会長ちゃん……❤️」

アタシよりも頭半分くらい小さな彼女の身体を優しく抱いて耳元で甘い言葉を囁いちゃう。

周りからの嫉妬の視線の中でお褒めナデナデ❤️ これがみんな大好きみたいで、一回味わっちゃうともう一回、もう一回って求めてくる。

それもあって、この援交部隊の売り上げは一週間で普通に300万とか越えちゃってて、アタシのお小遣い稼ぎで始めたものなのに、かなりの額になっている。

基本的に売上はアタシ8の、女の子たち2という分け方。

アタシの方が少なくて良いんだけど、この娘たち基本的にお嬢様でお金にこれっぽっちも困っていないから、むしろ10対0で良いなんて言ってくる娘までいる始末。

そのせいもあって、アタシのお部屋には銀行に預けられないお金がわんさかあって本気で困ってる……困ってるけど、このやり始めちゃった援交部隊は止まらないんだよね。

お金どうしよう、なんて考えながら会長ちゃんを抱きしめたら、その唇にキスをしていく。

「ちゅ……ん❤️ ちゅう……❤️」

「あ ❤ 真尋ちゃん、んっ ❤ ちゅうう ❤ ん ❤ 」

甘えるような会長ちゃんの可愛いキス。

アタシの唇に必死に吸い付こうとしてくる、どこか赤ちゃんチックなキスを可愛く思いながら髪を撫でつけて、優しく背中を撫でていく。

「ん……ふあ……ふー…… ❤ 」

「ふはっあ……はあ、はああ……真尋、ちゃん…… ❤ 」

キスを終えて唇を離したら、またしっかりギュッと抱きしめて、この娘は、会長ちゃんはアタシの為に働いたイイ子！ってアピール。

こんなことしてるから、みんなドンドンやる気だしちゃうんだろうけど……。

少しの後悔をしつつ、薄茶色のセミロングの髪をかきあげたら一息ついで——。

「それじゃ、今日は楽しんじゃおつか？」

——と一言告げてマイクを手に取る。

この売上報告会はお金の回収と、叱咤激励だけじゃなくて、みんなの交流会の意味もあったりする。

アタシと言うトップで成り立っているけれど、変にお互いの争いがおこると面倒だし？ ってことで、みんな仲良くしてねってこと。

この援交部隊に参加していない玩具もいるし、その辺の関係も少し面倒なんだよね。

色々なオナホで遊べるのは良いんだけど……この立場は疲れもする。

虐められてた復讐で始めて、色々な女の子で遊びたくてその手を広げて、お金欲しいとか思って援交をやらせだして…………全部自業自得。

お金があれば困ることないと思ってたけど、あり過ぎても困るってことをこんなうちから知ることになるとは……。

半ば自分で呆れながらみんなでカラオケを楽しんだ後に、アタシは——。

……。

…………。

「会長ちゃん……❤️ 準備おっけーえい？」

「は、はいっ❤️ もちろん、いつでも！」

——今週一位の会長ちゃんとラブホテルに来ていた。

これが一位の特権、ラブホでがつり4時間セックスタイムを設けてあって、アタシとエッチがしたくてたまらない娘たちは頑張ってる。

特に会長ちゃんと、委員長は競り合って競り合って、真面目だった二人がそちらのお店のお姉さんたちよりエッチしてるのが凄いよね❤️

結構お高い綺麗なラブホの一室、ここのお金も会長ちゃん持ちで、その前に食べた美味しいご飯も会長ちゃ

ん持ち……お金使う暇ない……！

それはさておいて、服を脱いだアタシは大きくてふかふかのベッドに座る。

自分でもスタイルは悪くないと思う。

腰は括れてるし、お尻も割と桃尻、おっぱいも美乳なCカップで乳首はピンク。

唯一おまんこは過去の虐めでビラビラはみ出るくらい使われちゃってるけど……。

そして、たっぷり色々な女の子のあそこを味わって焼けたオチンポ❤️ それを見せつけているところに、

会長ちゃんもベッドイン❤️

ボブカットにカワイイ童顔、なのに小生意気にツンとしたEカップのおっぱい揺らして、全体的にムチムチ

の身体で結構エロい❤️

アタシの玩具のなかでも割と上位に入る気持ち良さかも……なんて頭の中で女の子たちを思い出していく

けど、しっかり順位は決まらない。

でも、ま、会長ちゃんが一番稼いでくるのは間違いないし？ そんなノリでいるところに、彼女は寄ってくる

と、アタシのチンポを見て生唾ゴックン❤️

あー、もー、我慢しきれないビッチ感あってカワイイんだがらー❤️

「ほら、見てないで……おしゃぶり、して？ カウパー垂れちゃうし❤️」

「❤️ はいっ❤️ はああ❤️ 真尋ちゃんのチンポっ❤️ あうう❤️」

普段はおっさんのチンポしゃぶってる会長がアタシのチンポにメロメロ、気分良いよね？

だって、男の物よりアタシのが良いってことだもん。

ヨダレ垂らしそうな顔でチンポに顔を寄せて、彼女はアタシの洗ってもいらないチンポに舌を伸ばしていく。

「れろお ❤️ ん ❤️ ちゅう ❤️ しょっぱい ❤️ んん ❤️ ちゅちゅ ❤️」

「あー、もー……ロリ系なのにおしゃぶり上手いって、それだけでヤバっ ❤️」

可愛い顔しても、テクニックは人一倍、アタシのチンポの根元を優しく掴んだら先っぽを舐めていく。

舌先で亀頭全体をペロペロ舐めたら、そのまま裏筋を「れろれろ ❤️」してくる ❤️

「これっ、お嬢様学校の……生徒会長のテクじゃないって ❤️ っ ❤️」

「ちゅるう ❤️ えへへ ❤️ 真尋ちゃんの為に覚えたんですよー？ じゅるる ❤️」

可愛い、やわらかい唇がチンポに触れる気持ち良さにゾクゾクしながら頭を撫でていく。

サラサラ、ふんわりめの髪の毛に指を通す気持ち良さを楽しみつつ腰とチンポを震わせる。

「じゅっちゅう ❤️ 真尋ひやんの ❤️ チンポ……すきい ❤️ じゅるる ❤️」

「んっあ ❤️ 今は……会長ちゃんのチンポだから、好きにしていーよ？」

「 ❤️ ❤️ はふっ ❤️ じゅっるるう ❤️ じゅる ❤️ れるう ❤️」

チンポをしゃぶって良い、好きにしてってだけで本気で嬉しそうにおしゃぶりをしていく会長。

ベッドに座っているアタシ、会長もベッドの上で、土下座するみたいに身体を丸めてのフェラに腰が震えちゃう。

ちっちゃいお口でチンポを咥え込まれると、気持ち良くてたまんない。

足を延ばして、手を後ろについて首を反らしたら「ふー❤」ってお風呂に入ったみたいに一息。

「じゅるっじゅるる❤ ちゅ❤ じゅるる❤ じゅっぷ❤」

頭を揺らして、舌を何回も細かく動かしてチンポを舐めていく会長ちゃん❤

こんなに必死になってくれると勃起させ甲斐あるよねー。なんて思いながら

しばらくはされるがまま、会長ちゃんの必死な、本気のおしゃぶり、これに耐えられる男は少ないらしいけど、アタシにしたら慣れたもの。

気持ち良いけど、あっさり射精するほどのレベルではないので、深い呼吸をしながら我慢我慢❤

「じゅっぷ❤ じゅろろろろ❤ じゅるちゅう❤ じゅろっ❤ じゅるる❤」

気持ち良いフェラ、アタシのツボを捉えた舌遣いにチンポはビクビクしっぱなし。

とろとろ溢れるカウパーもどんどん吸われて❤ なんかもう、たまんない❤

このままお口に出そうか、どうしようか悩むけど……一発目はやっぱり、ね？

「会長ちゃん……そろそろ❤️ おまんこ使ってあげる……❤️」

「じゅちゅう❤️ ぷはああ……はいっ❤️」

アタシの言葉に素直に笑顔を見せる可愛い系ロリ顔❤️

見た目とのギャップって良いよね？ なんて思いながら、会長ちゃんが「顔を見ながら……」なんて恥ずかしそうに言うので、正面からしてあげる。

仰向けでベッドに寝かせた彼女のおまんこ、意外と剛毛なんだけど、それなりに整えてあるそこはとっくに濡れてる。

やる気満々って感じで、そこに生のままチンポを押し当てた。

会長ちゃんはピル飲んでて生ハメOK女子❤️ 完全にエッチの為だけにピル服用しているエロさに興奮しながら——。

「それじゃ……❤️ いく、よっ❤️」

「はあ❤️ はあ❤️ はあああ❤️ はいい❤️」

———ぽよんって可愛いおっぱいを揺らして寄せるように腕を動かした会長ちゃんのおまんこにチンポを押し込んであげる。

とろとろ蜜壺状態のドスケベなおまんこ、チンポをしっかり咥え込む見た目以上に深い穴❤️

「ん……❤ さあて、会長ちゃんはどこが好きかな？ んー？」

わざと深くまでは挿入しないで、カワイイ顔を見ながら浅い場所を擦っていく。

抜けそうなギリギリの位置を小刻みに擦りながら質問。

「はああ❤ あっ❤ お、奥、お願いします❤ 真尋、っちゃんのチンポで……奥っ❤」

「はいはい❤ もー、ほんっとスケベ……❤ ほらっ❤」

”ずつぶう ❤”

「ふああああ❤ あっ❤ ああああ❤ んんんんっ❤」

深い場所じゃなくて奥に欲しいなんてお嬢様がしちゃダメなおねだりをしてくる。

それにしっかり応えて深くチンポを挿入したら、片手の掌底で会長の下腹部、おまんこの上を強めに押しながら刺激❤

狙うのは奥❤ 子宮を刺激するマッサージに合わせてのピストン、普通の女の子ならまだ開発なんてされてないそこ。

でも、アタシの玩具たち、とくに援交部隊の女の子たちは日々エッチしているからしっかりと奥が育っている。

だからこそキク奥責め❤

「っ❤️ ほらっ❤️ もっと、もっと好きなだけ感じて良いんだから、ね？」

「っっっ❤️ ま、ひろちゃつ❤️ お、おくっ❤️ んんんんんんんんんっ❤️❤️」

「あは❤️ もうキちゃってる？ 会長ちゃん気絶したら終わりにするよー？ っ❤️」

弱い弱い奥責めをしてあげると、会長は身体を震わせて足をピクピクさせて、何よりおまんこを痙攣させてのガチイキ準備❤️

だけど、そのまま本気でイって気絶でもしたら、今回のご褒美タイム終わりにするよ？ なんて言えば――
一。

「っ！？ や、やだああ！ もっと、もっと真尋ちゃんと、おまんこ、しゅりゅつう❤️」

「だったら我慢我慢ってね❤️ っ❤️」

「ひぐううううううう❤️❤️」

――まだ終わりにしないでー、なんて甘えた声をだしてくるんだけど、このままだと気絶コースっぽい？
お腹を押してチンポで奥をごちゅごちゅ❤️ それを繰り返してあげて、どんどんイク準備を整えていく。

「はあああ❤️ だめええ❤️ イく❤️ 真尋ちゃ、んっ❤️ 手加減、しへえええ❤️」

「やーだポイっ❤️ 会長の雑魚おまんこ手加減しても即イキだし？」

「しょんにゃあああ❤️ ああああ❤️ くっひい❤️」

余裕のアタシと違って明らかに限界ギリギリな会長❤️ 小さな身体をピクピク震わせまくってる。

ホテルの大きめのベッドの上、必死な声で鳴いてるカワイイ女の子を追い詰めるピストン。

このイカせかたすると、会長は気絶率7割越えで、本人もそれわかって我慢してるっぽいけど、我慢したらその分辛くなるのはわかってないみたい❤️

可愛いロリ系のお顔なのに、ぶっさいくに鼻の穴を広げて顔真っ赤にしてのがたまんない❤️

その惨めな顔を見ていると興奮してきちゃって——。

「ほらっ❤️ イケイケっ❤️ イケって❤️ ほらあ❤️」

"どっちゅどちゅじゅっぽ❤️"

「んあああ❤️ あっ❤️ だめええつ❤️ い、いい、意識とぶうつ❤️ まだ、ま、っ❤️ んぐうううううううううう❤️」

「あっは❤️ 会長のイキ顔、ぶっさあ……❤️ アタシもっ、出るっ……❤️」

——深く奥を突いて、お腹を押しながらイカせちゃう❤

会長はロリ顔台無し、白目向いてるようなブサイイキ顔見せてダウンしちゃった❤

その時のおまんこの締め付け、痙攣でアタシも射精、濃いめの精液を気絶中の会長のおまんこにたあーっぷり❤

起きてるときじゃなくて気絶してから出すと、なんか背徳感たっぷり、かな？

まるで、オナホとかそんなの使ってる気分がしてこれはこれで楽しい❤

「ふふふー、会長……も少し可愛がってあげっからねー？」

さっきは気絶したら終わりって言ってあったけど、さすがにそれは可哀そうだし、ね？

その後もしっかりとたっぷりと犯して可愛がってあげたのでしたっと❤

.....。

.....。

.....。

「……………で、これは、どゆこと？」

「お、来た来た、へー、結構カワイイじゃん」

アタシは今、援交部隊の一人の女の子に呼ばれて、町の外れにある人気のない潰れたコンビニの後ろに来ていた。

車どおりが悪くて、あんまり客の入らなかったコンビニの跡地、建物にはアホな集団の落書きなんかがあつて、ゴミが散乱している。

その後ろ、ただでさえ車が通らない道の完全な死角に来ているんだけど、そこにいるのは援交をしてたはずの玩具、髪の長い美人系の委員長、アタシのクラスのクラス委員の吉野圭、圭ちゃんがいた。

いたんだけど、誰がどう見てもまともとは思えない男たち三人の前でアスファルトの上に全裸で正座させられている。

男たちは、アタシたちより少し年上って感じ？ ニヤニヤ笑ってタバコ吸いながらビールケースに座ったりしていた。

二日前、援交に出たはずの圭ちゃんからの連絡が途絶えて、やらせていることがことだから、あんまり大びらには出来ない状況でみんなで探してたんだけど、まさかこんなことになってるとは、ね。

委員長はかなり憔悴しているようで、アタシを見て「ごめんなさい、高木さん……」なんて疲れ切った声で言ってた。

どうやらというか、圭ちゃんはこの男たちに捕まって散々。二日以上嬲り者にされたみたい。

「いやー、コイツさあ、あんたに連絡入れろってのに中々やんないから滅茶苦茶ハメまわしちまったわ❤」

「…………ふうん」

男の一人が下品な笑い声を出しながら、圭ちゃんの隣にしゃがむと、肩を抱いて胸を揉んでいた。

アタシよりやや大きめのおっぱいが柔らかく歪むのを見せられていく。

バカそうな男たちは「全部で何人くらいいた?」「たしか一、20人以上じゃね?」「じゃあ、40回は余裕でやられてんな」なんて楽しそうに笑っていた。

アタシを呼べという命令に必死に抗った委員長だけど体力の限界か、何か脅されたのか頷いちゃって今に至るみたい。

ロクに寝かせても貰えてないのか、フラフラと頭を揺らす圭ちゃんは体力の限界のようだった。

身体には痣もあるし、相当乱暴に犯されたみたい。……顔にも二発ほど殴ったような跡がある、美人相手に良くそんなこと出来るよね。

それを見ているとその男はアタシに近づいてきた。

「で、さあ、お前らんとこ、結構カワイイのが援交しまくって稼いでるらしいんだって?」

「……………」

なんとなく言いたいことは分かる。その売上を自分たち渡せというんだろう。

もしくは、自分たちも一枚かませろ、かな?

「それ、俺らが手伝ってやるからよ、なあ……とりあえず、俺ら8のお前ら2で話つけようや」

ほら、きた……。

女の子拉致してレイプして、拳銃に脅迫?

手伝うって名目で売上奪った上に全員肉便器に浅い考えしてそう。

こっちが訴え出たら一発で終わるのに。

まあ、だからこそアタシを呼びつけて、トップを潰せば終わりって考えたのかもね。

…………間違ってないけど。

アタシがこいつらに屈服して、みんなに「今後はこの人たちの為に稼いで」とお願いすればみんな頑張ってくれると思うから。

「…………」

こんな頭が悪くて最低で、女の子を乱暴に扱うしか知らない男たちに支配される、きっとアタシだってタダじゃ済まない。

…………。

男の一人は「あー、思い出したらまたヤリたくなってきた……」なんて言いながら、委員長のおっぱいを揉んでいく。

抵抗は諦めているっぽい圭ちゃん、どれだけ、何をされたのか……。

「で、答えは？　まあ、俺らは無理矢理とかは好きじゃないからさあ……話し合いしようや、な？」

わざとらしいゲスい、いや、下水みたいな笑みを浮かべるカス男。

話し合いと言う名のレイプ、輪姦をする気満々って感じ？

委員長はそれに気付いて「酷いことはしないって！　絶対乱暴しないって言ったじゃない！？」なんて必死

に目を見開いて抗議している。

委員長は体力の限界まで嬲り者にされたうえで、アタシには絶対に乱暴はしない、って約束で呼び出すことに承諾したみたいね。

でも、男たちにそんな約束を守る知能はなかったわけで、抗議する圭ちゃんの頭を男が”ゴン”っと強めに叩いていた。

「うっせえよバーカ、生意気言ったからお前今日も徹夜決定な？」

「！？ や、やだ、そんな寝かせて……もう、頭痛いの……おまんこも……！」

徹夜、二日間不眠不休で犯されてたみたい。むしろ二日もアタシを呼ぶことに同意しなかったのは凄いと思う。

委員長はお嬢様で、普通の女の子なのに、アタシの身を差し出せば楽になれるのを乱暴な男たちの慰み者になることを二日も耐えたんだがら。

その上で、絶対アタシに手は出さないなら、とまで条件を認めるだけは認めさせた、その圭ちゃんの愛にクラクラ来そう。

そんなことを考えてたら、目の前の男がアタシに発情したのか、犯して写真でも撮って言いなりにしようとしたのか手を伸ばしてきた——。

”タタタタタタタタ！！”

「んぐべつああああ……あああ……ああああ……ああああああ……」

「！？　は、あ？　なに？」

「ん？　はあ？」

——ところでその首筋に小型のスタンガンを押し当ててやった。

小型だけど強力。セーフティ外してあるから30秒以上連続使用出来る、男の人の髭剃りみたいな？それ。

レスラーでも2秒で昏倒ってやつをたっぷり5秒は当てて放してあげる。

アタシの行動に残った二人の男、委員長の身体を触ってたそいつらが気づくのに2秒。

そして、絶対優位だと思って獲物に反撃されて、一人の男が激昂するのに3秒。

「てめえ、なにしてんだよ！！」

「…………」

その一人の男が立ち上がって、真っすぐアタシに向かってくる。

そして、その手でアタシを掴もうと無防備に伸ばしてきた。

もう一人の男はまだ委員長の隣にいて事態の把握がラッキーなこと出来ていない。

アタシは伸ばされた腕、何にも考えてない、握られてもいない、ただ掴むための腕をしっかりと見つめて——。

”ジャカッ！”

——袖から取り出した三段ロッドを振るい、伸ばした。

それを振り上げて躊躇いも何もなしに——。

”ひゅっ！”

”ガッゴッ！！”

「いぎやああああああああ！？！？！？」

——男の手、その指目掛けて振り下ろした。

重さよりもしなりがキモノ、鉄の鞭のようなロッドは男の指に直撃、運良く爪がはがれて指が折れてくれたみたい。

末端神経、指の痛みはかなり激しく辛い。

でかい団体の男が手を押さえて涙を流す姿は笑えるけど、笑ってる暇もないでのロッドを持つのとは反対の手に持ったスタンガンを首に押し当ててやる。

今度はたっぷり 10 秒以上。

そいつが倒れて痙攣しているのを見たら残った一人に近づいていく。

そいつはまだ把握しきっていないのか、ポカンとしながらとりあえず立ち上がったって感じだったのでそ

の顔目掛けてロッドを叩きつけた。

何度も、何度も、何度も……動かなくなるまで。

「準備くらいしてくるっての……」

血のついたロッドを倒れた男の服で拭う。

過去にアタシは地獄のような虐めの日々を受けてきた。

何度も犯されたし虫も、画鋲も飲まされた。便器も舐めさせられたし、全裸で廊下も走らされた。

万引き強要されて、雨の中倒れるまで全裸で立たされたこともある。

そんな経験をしているアタシだからこそ、多少は鍛えて、多少は備えてある。

何かあったときに反撃できる程度には、だけど。

「あ……あ…………」

「圭ちゃん、大丈夫？」

「高木さんっっっ…………！」

「おっと、お……ん……」

呻く男たちを見下ろしているとフラフラと立ち上がった委員長が抱き着いてきた。

おまんこから精液垂らして、痣だらけの身体、よく見ると噛み跡もある。

ボロボロにされても尚、アタシを案じてくれていた彼女を優しく抱きしめてあげた。

「……やられちゃった？」

「うん……うん……ごめんなさい、私、高木さんを……呼び出して、酷いことされて、辛くてっ……！」

嗚咽交じりに言葉を紡ぐ彼女を抱きしめて、怖くない一って背中をポンポン。

相当酷いことをされた二日間だったのは伝わってきて、それを安心させるように優しく優しく受け止めてあげた。

その後、早く休ませなきゃ、かつ委員長のご両親への言い訳作りの為に、みんなで色々やんなくちゃと思っていたんだけど、彼女のお願いで一回だけエッチをした。

男たちに汚された身体を、マーキングしなおして欲しいってことだった。

アタシは、玩具のみんなに委員長の無事を教えて、言い訳作り、二日間の無断外泊の理由作りを任せてホテルにいった。

改めて、ボロボロにされた圭ちゃんを優しく——。

「ああああああ❤️ いくつ❤️ だめっ❤️ 奥っ❤️ んあああああ❤️」

——はしないで、激しく抱いてイカせまくって上げた。

玩具は大切にしないと、ね？

蟻で固めた鳥の羽根
第四話



《蟻で固めた鳥の羽根 第四話》

「えーっと、それじゃあ……今日は会長は新規の二人を連れて行って？ 圭ちゃんは、ごめん、ポリスメンのおっさんと、良い？」

「はいっ！ 任せておいてください！」

「ええ、もちろん」

圭ちゃんがDQNグループに襲われてからしばらくした頃、アタシは色々あって今マンションの一室にいたりする。

その場にはソファに座るアタシの前に会長、学級委員長の圭ちゃん、それと前は18人だったけど今は31人にまで増えた援交部隊の玩具たちが立っている。

そして何よりも——。

「んで、キミらは各グループについてって、問題があったときは丁寧に解決ね？」

「「「うっす！」」」

「…………うん」

——圭ちゃんを襲ったDQNグループ、前は髪を染めたりしてたけど、今は黒髪になっている彼らがいた。

あの日、ボッコボコにしたは良いけど不安が残った。

援交部隊はそこら中に散ってるし、女の子たちな訳で彼らの仲間は結構いるようだし狙われたらやばい、と。

もし、それで事件になれば「お嬢様学校の組織的援交」なんてニュースに受けそうな見出しが出る可能性も

あった。

それはやばいし、良い機会だし援交部隊は解散させようなんて思っていたら、彼らに声をかけられた。

その時も防犯グッズは持っていたけど、油断してない男三人、今度こそボロボロになるまで犯されるかも、

と思っていた。

でも、彼らはアタシに頭を下げてきた。

どこの野生世界のルールか知らないけど、自分たちをボコボコにしてアタシを尊敬した、という。

指折られて、顔をグチャグチャに殴られてるのにアホかと……。

その気持ちが嘘か本当かはわからないけれど、おとなしくしている内にそいつらに首輪……でもないけど

餌を与えることにした。

それは「援交部隊のボディーガード」をすることでの給料と、「援交部隊の女の子を定期的に抱いて良い」

という二つ。

もともと、時折トラブルはあった。金払いの悪い男や、無理矢理迫ってくる男など。

手広くやっているとどうしても週に何度かの問題は起きてきてたんだけど、それをDQNボディーガードで解決。

守らせて、その代わり売上的一部を給料として渡しつつ、仕事をしたら一人、好きな娘をお持ち帰りOKということ。

この二つが非常にピッタリはまっていった。

もちろん、最初はアタシの指示でも玩具たちからの不満は少しあったし、委員長、拉致られて輪姦された圭

ちゃんは拒否したけれど、アタシの説得もあって今は順調に機能している。

いや、機能しちゃって困っている。

彼らがガードについていることで問題発生は激減して、それ故にか援交部隊の人数は一気に増えた。

しかも、彼らは車の運転がそれぞれ出来るので移動も楽になって安心という状況。

金と、カワイイ女の子、この二つの餌がぴったりとハマって結果、非常に援交部隊は順調でアホのようにお金が貯まっていく。

人数も増えた結果、アタシの成人しているペットが管理しているというマンションの一部屋を借りて、売上や、誰がどこに援交に行くかなどの管理はそこで行う様になっていった。

もはや、そういう店ってレベルになりつつあって……怖い。

アタシがいなくても生徒会長と圭ちゃんが中心になって割り振っていき、もうシステム化がすごい。

「はー…………」

「真尋ちゃん……お疲れ？」

「ん、んー、そうじゃないけどねー」

心配そうにアタシの顔を見てくる小柄な会長ちゃんの手を引いて抱き寄せる。

優しく撫でながら、ここまでになると呆れてくるんだよね、と内心勝手なことを思う。

アタシが始めたことで、ここまでお金が集まると…………ね。

目を細めて、薄茶色の髪を軽く弄りつつ、目の前のローテーブルに置かれたお金を見る。

一週間で稼いだ額とは思えない札束。

確か232万円あって、この5割がアタシ。

3割が玩具たちにそれぞれ回数によって分配。2割がDQNたちへ。

何もしなくとも、毎週100万以上アタシの懐に入ってくるシステム、乾いた笑いが出てくる。

……税金のあれこれに詳しい玩具も必要かも。

なんて考え出すと、もうはやただの学生じゃなくて考えていることが社会人？

よくわからないけど……ま、破綻するまではいいか。

なんて考えながら、会長ちゃんのふんわり系のおっぱりを揉んで、頬っぺたにちゅー❤️

もし、何か起きたらお金を持って逃げよう。そんなことを考えながら立ち上がる。

「それじゃ、会長、圭ちゃん……あと任せんね？」

「うん、了解」

「真尋ちゃんお疲れ様です」

手を振り、その場にいるみんなにDQNくんたちにも手を振ると彼らは深く頭を下げてきた。

どこのヤクザ？ と疑問を覚えつつ部屋を出ていき。

そして、設置されているエレベーターに向かわず非常階段に向かいスマホを取り出した。

「……………」

盗聴のアpri。

部屋にこっそりと取り付けているもので、誰にもバレてないそれで起動。

イヤホンを耳に着けて聞くのは部屋の中の会話。

アタシのいなくなつて部屋の中では——。

『それじゃあ、全員に生き渡った？ 額と回数が合ってないって人はいって？』

圭ちゃんの声。

『来週も頑張ろうねー！ 真尋ちゃんの為に！』

会長の声。感度は良好。問題なく聞こえる。

しばらくは、来週の計画やら、何やらの話でガヤガヤしてたけど、ひと段落したとき。

『それにしても、真尋さんってマジで凄い人っすねえ』

お、DQNくんの一人。

『こんなん、もはや会社じゃないっすか』

『当然でしょ、高木さんは場当たり的な行動はしないんだから』

『真尋ちゃんは私たちのこと考えてくれてるし』

『いや、ほんっと年下でしかもあんな可愛い顔してて、すげ一人もいるんだなあって』

『それを襲おうとした罰当たりもいたけどね？』

『……あんときはマジですまんかったです、吉野さん』

『いいわよ、高木さんが許した以上は私はもう気にしてないし』

『ほんっと真尋姐さん様様って感じだなあ……』

『ほんと金も手に入るし、カワイイ女とやれるし』

『しっかり真尋ちゃんに感謝して働いてね？ 頑張ってくれたら私もたっぷりサービスするし』

『会長さんのサービス……やる気てるなあ』

『お、俺は一回くらい、その、真尋姐さんにお願いした——』

『ダメよ』

『ダメ！』

『———残念。俺あ、あの人めっちゃ好きなんだけどなあ』

『それはみんな一緒』

『だよー？ 真尋ちゃんはダメ、私がなんでも、お尻の穴でも舐めてあげ ”プチっ”

———もういいや。

「…………」

盗聴を切ってスマホをしまう。

そのまま非常階段を下っていきながら考えるのは———。

「あいつらはバカなの？」

——ということ。

誰か一人くらい反旗を翻して、まとめあげて男を味方につければアタシなんて一発だってのに。

ここまで脳みそお花畠に崇拜されると、なんかイライラしてくるのはアタシのワガママだと思う。

イライラを隠さないで髪をかきあげたら、ゆっくりと階段を下りてゆく。

でも、何かイラつく、このイラつきは良くない。

そういうときは——。

……。

…………。

「さーあーてーえー？　だーれが貞操帯外して欲しいのっかにゃ～？」

——カラオケで楽しく玩具遊び、だよね？

広いソファに座ったアタシはマイク片手に玩具たちに声をかけつつ、反対の手で鍵の束をクルクル回す。

広いパーティールームに集めた玩具たち、理事長に、指導主任の真紀せんせー、それに他にも玩具生徒数名。

それとママ❤️ 全員貞操帯付きの玩具たち、そこに貞操帯なしのポチこと、過去にアタシをぼろ糞虐めた主犯、今は黒ギャルおバカビッチの石井紀子ちゃん❤️

全員がスカートめくり上げてガニ股で貞操帯見せつけてるから部屋の中メス臭くて鼻曲がりそう。

ポチはチューブトップに半ケツ見えてるようなスカートでミルクチョコレート色の肌見せつけるスタイル。

そんな頭悪そうなビッチ服着て、アタシの隣、隣だけど床に正座中。

貞操帯付きの玩具たち、特にママ含めたおばさんたちは必死に腰振って下品にアピールしてて、生徒の玩具

たちはその品のなさに驚きつつも自分たちも真似して腰振ってするのがカワイイ。

「りーじちょ❤ 貞操帯、外して欲しいの？ アタシのチンポ……欲しいの？」

「ほ、欲しい、欲しいんですっ❤ 真尋さんのチンポ、も、もう、一週間、我慢がっ❤」

会長のママさんだけあってカワイイ童顔のおばさん、しかもおっぱい大きくてエロい。

普段はお上品ですって顔しているのに今はガニ股腰振りして必死に年下のアタシにおねだりしてて——。

「ふふ……きっと❤」

「あああ❤ 真尋さんっ、もっと……もっと言って……❤」

「キモイ、気持ち悪い、歳の差わかってる？ それに、アタシ生徒なのに❤ ほんっとキモイ❤」

——カワイイ❤ しかも、ドMなのもポイント高い！

足を組み替えて余裕を見せつつたっぷりバカにしてあげると、それだけで理事長は腰をヘコヘコ振っていて惨め。

それを楽しんだら次は真紀せんせー、理事長の下品さに顔を赤くして、更に他の生徒もいるからか、恥ずかしがってるみたいで腰の振りがイマイチ。

「真紀せんせー、チンポ欲しくないの？」

「え！？ ……ほ、欲しい、けれど、もちろん……」

「の、割には腰振りイマイチじゃなーい？ 理事長見習いなよ❤ そのおばさん、それで45だからね？」

「っつ…………」

ニヤニヤ (・∀・) しながら、からかってあげると真紀せんせーは顔真っ赤のまま腰振りを速めていく。

おっぱいはない代わりに大きめのムチムチ下半身の腰振りはダイナミックでGOOD！

ヘコヘコ無様に腰を振るおばさんたち、特に真紀せんせーなんて生徒からしたら厳しい先生なのに、その人がチンポ欲しさに腰振り

「ほーら、しっかり、何が欲しいの？ 真紀せんせーは何で腰振ってるのー？」

「……！！」

生徒たちの前での腰振りってだけでプライドとかグチャグチャっぽいけど、それを更に追い詰めてあげる。

真紀せんせーは顔真っ赤、美人で出来る女ってことで厳しくても生徒の人気は高かったのにね？

貞操帯でガードされちゃってるおまんこから汁垂らして、それが太ももに伝っちゃってるのがまた無様❤

生徒たちも「真紀先生が」「理事長も、あんな……❤」って年上の女性までもが恥を晒す姿に興奮してるみ

たい。

「っ！ チンポが高木さんの、ち、チンポが欲しくて、たまらないの、よっ……わかってるでしょ！？」

「あっはははは～❤ キレないキレない、怖いなー❤」

もう恥のゲージが限界超えちゃったのか真紀せんせーは真っ赤な顔で腰振りながら怒りおねだり？

ヘコヘコとむっちり❤な下半身揺らして、下品な腰振りしている姿を楽しみつつ、チラッとその横を見る

とこ、そこにいるのはママ❤

アタシと同じ薄い茶色の髪。

緩いウェーブがかった髪をまとめて前に垂らしているおっとり清楚そうな見た目なのに、貞操帯つけたお

まんこからマン汁垂らして腰振り❤

ママもママで必死にで「真尋ちゃん、お願ひ……もう、ママ我慢できないの……❤」なんて甘えた声を出
している。

そんな必死なおばさんたちも良いけど、後輩や先輩たちもその恥知らずなおばさんに感化されてどんどん
興奮しちゃってるのかな？

「真尋さまっ❤ 一週間我慢しましたっ！ お慈悲を……」

「センパイっ……ぜったい、絶対気持ち良くさせますからっ❤」

「お、お願ひですっ……もう、おまんこ……我慢無理なんです……！」

なんて甘えたこと言ってきて、その全員が情けない無様な腰振りしちゃってる❤

メスの匂いというか、なんかもう凄い匂いになりつつある部屋の中で、アタシは笑いながら鍵の束をクルクル回していく。

みんながみんなその鍵束に釘付け❤ 貞操帯を外して欲しくてたまらないのが見え見えで媚びてきてる
❤

アタシのチンポが欲しくてたまらない淫乱、ドスケベな玩具たち❤

腰振って、無様にマン汁垂らしているけどどーしょっかなーと笑いながら、「ママ、こっち」と呼び寄せる。

貞操帯を外して貰えると勘違いしたのか、嬉しそうに寄ってきたママだけど、誰も外してあげるなんて言つてないんだよね～。

「ママ、とりあえずチンポ舐めさせてあげる❤ 上手く出来たら外してあげるかもね～❤」

「っ❤ ま、真尋ちゃんっ！ ママ、頑張るからね！ っ❤ おちんぽっ❤ おちんぽっ❤」

「あはは❤ がっつきすぎ……❤」

フェラを上手く出来たら、なんて言えばママは真剣な顔になってしゃがみ込むと、人に見られているのも忘れたみたいに実の娘たるアタシのチンポを舐めだした。

「じゅるるるる❤ じゅっぽじゅぶ❤ じゅるちゅじゅるるるる❤」

「うわー、っ、必死過ぎで、引くかも……❤」

娘のチンポだってのに本気でおしゃぶり開始のママ❤

あたしのスカートをまくって下着をずらしたら、御挨拶もそこそこの唾液でトロトロのお口で咥え込んでじゅぼり出した。

音を立ててチンポをしゃぶっている間も、エロ蹲踞、ガニ股で腰を振る徹底的な媚び方は正直凄いと感心し

ちゃうかも❤

周りもアタシのママだってわかっているからドン引き？ ううん、興奮してるみたい❤ 変態ばっか❤

「あ～❤ ママのフェラへた……もっとしっかりしゃぶらないと貞操帯外さないよ？」

「じゅるるるっ……が、頑張るからっ！ ママ、ちゃんと真尋ちゃんのオチン、むぐぅ！？」

「喋ってる暇あったらしゃぶる～❤」

お預けを匂わせると慌てて何か喋り出すママだけど、そんなの良いからちゃんとして？ って頭を押して深くまで咥え込ませちゃう。

実の母親の喉の奥を遣う興奮に、カウパーを漏らしつつ、まだ腰振っている他の玩具を見て、今度は床に座るポチの頭を軽くたたく。

「ひやうっ❤ 真尋さま……えっと……はああ❤ んっ❤」

少しボーっとしてたみたいなポチ❤

顔は赤く染まっていて、目もトロンとしちゃってる。

ポチにはいわゆる「セックスドラッグ」を服用させていて、そのままお預け状態にしている。

身体が敏感になって、頭の動きは鈍いのに快感は強く感じちゃう状態のそれ。

普段は使わないし、玩具にも使わないけどポチは別、アタシの中では何しても良い使い捨て扱いだから。

そのポチを玩具たちの前に差し出したら——。

「とりあえず一、そのポチ、100回イカせたら、誰か一人にチンポあげるねー？」

——なんて軽く提案。

それに、ポチは理解できていないみたいで「はああ、おまんこお……❤」なんてバカ面晒している。

玩具たちは「100回もイッたら」「死ぬんじゃ……」なんて不安そうにしちゃっている。

普通に考えて100回の絶頂なんて致死量、そんなことをしたら目の前の相手がどうなるのか？って不安みたいだけど——。

「あ、もちろん、頑張ってくれた娘優先だからね？」

「「「…………」」」

——アタシの魔法の言葉で全員の目の色が変わっちゃった❤

脳みその奥まで蕩けていて、これから何をされるかわかっていないポチにみんなの手が伸びていく。

「ふ、ふふふ、あー、バッカみたい」

「じゅるる❤ じゅちゅう……❤」

「ママ、ちゃんとしゃぶって？」

「は、はひっ❤ じゅちゅる❤ じゅぷう❤」

目の前ではポチが数人がかりでイカされていく。

敏感になったポチの身体を、真紀せんせーも、理事長も他の生徒も群がって弄っていく❤

「ひついひぎいいいいい❤ いくつ❤ イクイクイクイクううううう❤❤❤」

「イッた？ 何回目？ もっと、もっとっ！」

「バイブ、太いやつでおまんこかき回しましょう？」

「クリを捏ねながらGスポット責めていくわよ！」

ポチ、壊れちゃうかもねー、使い捨ての割には長持ちしてたかも？

アタシを虐めてた主犯格、今更どうでも良いけど、ポチの靴の裏とか舐めたなー、なんて懐かしい記憶。

思い返しながら見つめるのは壊されていくポチ❤

100回イクとか、普通に考えて無理だけどどーなるっかなー？

楽しく観察しながら、ママのフェラを楽しんでいった。

.....。

.....。

.....。

「はあああ……割と楽しかったかも……❤」

全力で遊んだ後はイライラも消えてスッキリ！

気絶してもイキまくりのポチはかなりヤバそうだったけど笑えたからおっけー❤

あのあと、適当に二人くらい犯してあげて、おばさん連中にレズセックスさせたりなんだり楽しんでアタシは一人帰り道。

制服のまんまで深夜だけど、警察に見つからない道は把握済み。

タクシーで帰っても良かったんだけど歩きたい気分ってやつ？

公園に入って、一通りもないから静かな歩道をゆったり歩く。

何にイライラしてたのかも忘れた感じで、穏やかで、少し物足りない気分。

考えることは沢山、お金の管理も、玩具たちの管理も、ワートリの次の展開予想も。

ゲームもやんなきゃ、コードヴェイン積んでるし、買ったきりのものも多い。

エッチなことも楽しいし気持ち良いけど、詰め込み過ぎると飽きるしねー。

「いっそ、どっかに逃げよっか—————」

瞬間。

アタシの身体に衝撃？ 刺激？ が走った。

聞こえてくるのは聞き覚えのある”タタタタタタ”という軽い音。

電気の跳ねる音。

熱いとか苦しいとかはなく身体全体がビキッと傷んでその後は、身体の動かし方も忘れたように地面に倒れていく。

そして、聞こえてくる声。

近いはずなのに、とてつもなく遠くから——。

「お、結構カワイイねえ ❤ 久しぶりの当たりちゃんかなあ……？」

「あ…………え…………」

——ロクに声も出せないまま。アタシは—————。

蟻で固めた鳥の羽根。前振り終了。

蝶で固めた鳥の羽根
第五話
チソ負け編



《蟻で固めた鳥の羽根 第五話・チン負け編》

何が、起きたの？

何が起きてるの？

「あ…………あ…………」

身体が動かない、身体が痛い、熱い！

ぐったりして身体が動かない、動いてくれない……この感じは……？

自分でもわからないまま、倒れて今は……運ばれている……？

眼は見えるからわかる。

少しほんやりしているけど、アタシは誰かに担がれて運ばれていた。

これはなに？ 復讐……だとしたら心当たりあり過ぎて困る。

でも、なんか、そんな感じもしないし、鼻に届くのは加齢臭ってやつ？ おっさんの臭い。

それを嗅ぎながら連れてこられた場所は……どこかアタシにはわからなかつたけど、公園の公衆トイレの裏手だった。

用意していたのか、芝生の上に置かれた段ボールの上に仰向けて寝かされたアタシ、本当に用意周到みたいで手錠をかけられた。

そして、その手錠に何かを、その時のアタシは分からなかつたけど、筋トレで使うようなアンクル、重りを手錠につけられたみたい。

そんなに重くないはずだけど、多分スタンガンを押し当てられて身体がマヒしているアタシにはその重さだけで手を動かせなくなっちゃう。

アタシを拘束して安心したのは、そこで初めて相手がしっかりと見える位置に入ってきた。

と、言っても、如何にもな目と口だけ穴の開いたマスクみたいのを被っている相手だし、薄暗いので良くわからない。

けど、デブい身体している男なのはわかった。

その男が何を…………って、あ、これ、レイプだと同時に結構前に担任の先生がH Rで——。

『——ニュースでもやっていたかも知れませんけれど、性犯罪者がこの地区の近くで出没しています、十分注意してください』

——って言ってたのを思い出して、ニュースでもチラッと話題に出てたのを思い出した。

援交部隊にDQNくんたちをつけさせたのだって、このニュースを聞いて不安になったってのもあるくらい。

意識の中にはあったはずで、他人のことを気にしていたのに、アタシ自身がやられるとか……笑えて来る。

相手は、アタシの鞄を漁って、中に入っていた封筒に入った札束、今日貰った援交の売上を見て「なにこの大金！？」とか驚いてた。

そして、財布も出されてその中を漁られて当然のように学生証を抜き取っていた。

「へええ、あ、お嬢様学校だねえ ❤ 高木、真尋ちゃん、ね……実物も可愛いけど写真も可愛いねえ ❤ ぐひひひ ❤」

「…………」

下卑た笑みを浮かべて、自分のスマホでアタシの学生証と、アタシの顔なんかを撮影する男を少し冷めた気持ちで見ていた。

……誰かが画を描いた作戦とか、襲撃とか、復讐でもないただのレイプ、か。

身体は動かないし、手錠で繋がれた手も動かない。

でも……だから？ 犯したいなら犯せば良い。

そんな気持ちで元々痺れて力の入らない身体から力を抜いた。

制服の内ポケットにはスタンガンと催涙スプレーが仕込んであるけどこの状況じゃ使うのは難しい。

だったら、したいことしてさっさと帰ってと思う。

帰ってゲームやんなきゃだし、30分もしたら終わる？

そんなことをぼんやり考えて、今はとりあえず時間が過ぎるのを待つことにした。

好きにしてくれて問題なっし、どうせアタシ、『女の子の方』だとあんまし感じないし。

過去に犯されまくった時も、痛いと気持ち悪いがマストで気持ち良いなんてなかった。

アタシの身体って男としての部分が多いんだと思う、だから女の子犯すの好きなんだろうし。

と、そんな余裕で自己診断までする状態でいたアタシをレイプ犯は写真撮ったりして「お、結構余裕だねえ」なんて楽しそうにしている。

もしかして泣き叫んで欲しかった？ ごめんねー？ って、そんな気分。

この男は女の子を組み敷いて犯して自分が優れているって思ってるかもしれないけど、アタシあんたの何倍も女の子抱いてるからね？

ざっくり数えるだけでも50人は余裕、しかも全員素人。

あなたはどーなんでしょ？ レイプ事件は確か5件だっけ？ 発覚していないのも入れて10くらい？ す

ごーい。

別に強がっているつもりはない。

でも、そんな気持ち。思っているは「早く終わらせて」「ゲームしたい」「コンビニ寄って帰ろうかな」くらいのもの。

そんなアタシをどう思ったか、どう見たのか知らないけど男はスカートに手をかけて捲りあげて、その下のショーツをずり下ろして——。

「お……」

——動きを止めた。

そこにあるチンポを前にして動きを止めていた。

「……………」

あー、犯される前提で考えてたけど、ドン引きされる展開かな。

ふたなりは認知されてるけど、ふたなり無理って人いるしね。

実際、虐められた当時、学年の童貞の5分の4を卒業させたアタシだけど、少数は「チンコついてる女とか無理」とか言ってたし。

昔を思い出しながら、口を動かして声が出るかを確認したら——。

「げほっ……んん……お金は持って行って良いから……終わりで良いよね……？」

「…………」

——そう持ち掛けた。

どうせあのお金はまた来週には入ってくるし、使い道に困っているもの。持っていかれても痛くも痒くもない。

変な意地を張って乱暴されるよりは『金』という逃げ道を与えてあげる。

女の子を襲ったのはお金目的です、犯そうと思った訳じゃない、犯そうとしたけど予想外にビビッた訳じゃないですってね。

もう少し怯えたフリした方が良かったかな？ そうすれば——。

「んあっ！？」

「いやあ、せっかくのフタナリちゃんだし、これは楽しませて貰わないとねえ❤ うひ、カワイイちんちん❤」

——なんて考えていたアタシのチンポがおじさんの脂肪が乗った太い指でつままれる。

その刺激に腰が震えるのと同時に、おまんこに冷たい何か、ローション？がかけられた。

自分でもしばらく弄ってない、昔散々玩具にされたそこに——。

「おまんこは結構使いこんでる？ んお、でも、きついというか固いねえ……ほぐしてあげなきゃねえ❤」

「つつあや、やめっ……！」

”ぬちゅっ❤️”

「っっっ！！」

——男の太い指が予想よりずっと優しく挿入された。

過去、虐められてた頃には笛、ペン、モップの柄なんかが雑に突っ込まれてかき回されていたそこに挿入された太い指。

と、同時にチンポにもヒヤっとするローションをかけられじっくりと上から下に、下から上にしごかれていぐ。

「んぐくぅう～～～！」

「ん～、使い込んでるのに固いおまんこってのも良いねえ❤️」

気持ち悪い男の声、多分おっさん？ その声を聞きながらおまんことチンポを同時に刺激していく。

指を挿入されたおまんこは、ヌポヌポ音をさせながらの出し入れ、それに合わせるようにチンポもシゴかれていく。

レイプ犯の男にされても気持ち良くなんてないし、おまんこも結局……何かくるわけでもない。

やっぱりアタシは男寄りのフタナリなんだと再確認しだしてた頃に——。

「クリ無し竿あり、玉無し……Gスポット（コリコリ　ポイント）はどおっかなあ？」

”こりいっ”

「～～～～～！」

——男の指がアタシのおまんこの中のどこかを触った瞬間に腰が軽く跳ねた。

それが多分きっかけだったんだと思う、ずっと忘れてたというか忘れようとしていたアタシの女の子の快感の部分。

女として自信がない訳じゃない、顔だって可愛いし、胸もそこそこ、スタイルも悪くない、でもどこか自分は男寄りだと思っていた。

それなのに、それなのにそれなのに——。

「っ！！　や、めっ……て……！」

「お、余裕ない声可愛いねえ”　やっぱりここは弱いんだねえ？」

”こりっこり”

「ひっぎっ！ っ……………♥」

——男の指がアタシのおまんこの気持ち良い場所を探り出してそこを刺激されると腰が跳ねる。

気持ち良くなんかないと、強がりではなくそう思っているのに、だんだんとそれが気持ち良くなってくる。

アタシは、アタシのおまんこは気持ち良くなれない訳じゃなくて、あの当時はまだ準備が出来てなくて、今は眠っているだけ。そう後から気が付いた。

じんわりと、乱暴ではなく探るような刺激に下半身が震えてきて、そこに合わせて——。

「こっちも忘れてないからねえ♥ お、立ってきた立ってきたあ♥」

「っっ！！」

——チンポも扱かれると、脳みその色々な部分に火花が散る感覚。

だんだんと、気持ち良いってことを身体が認めたくないのに認めようとしてくる。

男の脂っこい手でチンポのカリ首狙いで小刻みにしごかれながら、おまんこのコリコリしている場所を指の腹で撫でつけられると——。

「お♥ おまんこ狭くなつてキタキタ♥ 真尋ちゃん敏感だねえ♥ 普通こんな風に襲われてスグ感じないよお？」

「なにっ、いつへつえつ！！ 感じてなんかつあ……つあ！ あっ！ っつ！ ふーふー！！」

「おっほ❤️ 睨みつけかわいー❤️」

———気持ち良さが昇ってくる。

今まで一度も感じしたことのないおまんこの気持ち良さが。

動かない身体をどうにか動かそうと悶えながら、腰は意志とは関係なく無様に震えている。

チンポはしっかり勃起しちゃって、ローション手コキに反応しながらカウパーをトロトロ垂れ流し状態。

まるで発情したメス、アタシが笑っていた玩具やポチみたいな姿になっちゃってる。

でも、それを止められないし、どうにもできない。

まだ身体は動かせそうにないのに、気持ち良いのだけはハッキリ伝わってきて……！

「おっぱいはー？ んあ、あー、こんな危ない玩具持ってたらダメだよぉ？」

「あ……っ！」

男はアタシの制服を捲り上げて胸を露出させようとしたら、内ポケットに入ってたスタンガンと催涙スプレーに気づいて没収された。

身体が動くようになったら隙を見てぶち込んでやろうとしていたのに……それを奪われたら、もうっ……！

「おお～❤️ おっぱりも美乳って感じで良いねえ❤️ 乳首も綺麗だしコリコリしながら、おまんこも……❤️」

”くりくり❤️”

”ぬぼぬぼ❤️”

「ひいっ…………っ！！！」

「可愛い声出しちゃってるえ❤️ うひひひ❤️」

乳首を摘まれる刺激。

おまんこを指でほじられる刺激。

二つとも女の子の部分への刺激で、それが凄く頭の奥まで響いて、気持ち良くてたまらない。

声だけは出したくなくて耐えているのに、少しづつ漏れちゃう。

いっそ、大声出して助けを呼ぼうか迷うけど、この無様さを人の見られたくないって気持ちと…………ほんの少しだけど女の子の快感を身体が欲しているのを感じる。

おまんこを刺激されて、乳首を、おっぱいを刺激されていくとその気持ち良さに腰が震えちゃうし、チンポもピクピク震えてカウパー漏らしている。

ほんっと、最低な状態になっている自覚もあって、恥ずかしいし、屈辱的なのに……気持ち良いっ……❤️

「真尋ちゃんはおまんこや乳首の方が敏感なフタナリちゃんなんだねえ❤️ いいよお。おじさん好きだよお❤️」

「…………っ！　……きもっ…………！」

「うひひひ❤ 可愛いねえ❤」

おまんこの方が敏感なんて言わるとなんか恥ずかしくなってくる。

大人しくしていた方が絶対良いのに、ついつい真っ赤な顔で睨みつつ罵倒するけど、相手は気にしてないどころか楽しそうにしている。

「ほおら、ここ、Gスポットに慣れてくるとぉ。このお尻側のポイントも悪くないでしょ？」

「っっっ！！」

「ここをゆっくりゾリゾリしてあげながら、ビンビンに勃起した乳首を弾くとぉ……？」

”ぞりい❤　ぞり❤”

「っうっく……！　くっ！」

太い指による纖細と言うか陰湿でねちっこい責め。

アタシが感じる場所を増やしていくように、開発でもしているつもりなのか、指で色々な場所を探られる。

一か所だけなら耐えられるのに、場所を変えて、触り方変えて、乳首、ときどき脇腹辺りまでなぞられると、

もう……。

声を我慢するので精一杯。

チンポは情けないくらい、飼い主を前にした犬みたいに揺れてカウパー漏れまくり。

感じている声だけは出さない！ そう思っているのにどんどん指が強く刺激てきて、強いだけじゃなくて緩急つけてきて——。

”ぬぷっ❤”

”こりこり❤”

”ぬちゅう❤”

”ずつぶ❤”

”こりゅう❤”

「っ！ っつ！」

——もう我慢できないっ！ 声が溢れるって言うかイクつと思った瞬間。

”ぬぽっ……”

「いっ……え！？ なっ…………！」

指が引き抜かれた。

口が勝手に「なんで？」と言いそうになったのをギリギリで我慢するけど、「信じられない」みたいな顔をしちゃってる。

それに、自分の意志とは無関係で腰がヘコヘコ、さっきのママや理事長たちみたいに揺れている。

あまりの恥ずかしさを感じつつも、イカせて貰えなかつたっていうショックが強すぎて口をパクパクさせていたら——。

「やっぱり、最初の一発目はこれで覚えさせないとねえ❤️ おじさん、レイプって嫌いだから毎回気持ちよくなつて貰つてんだけよお❤️」

「っつ！！ っ！」

——男はゴソゴソと動いてズボンを脱ぐとチンポを取り出してきた。

それを見てアタシは生唾をゴクリと飲んだ。

長さはアタシのとそんなに変わらないように見える。

でも、太さ、形……色々な要素がアタシのチンポとはまるで違う。

「ほーら、真尋ちゃんのおちんちんとこにちわーってね❤️」

「ひうっ……！（ナニコレ、熱いし、え、これ、チンポ……これ……）」

男のチンポがアタシのチンポ……ううん『おちんちん』にピタッと当てられた。

やっぱり長さはそんなに変わらない、と思う。

アタシのが前に計った時 15 センチくらいだったから、このチンポは 16 とかそんなくらいに見える。

でも、まず太さが明らかに違うし、カリ首というか亀頭の傘の形も全然違う……。

チンポの下には明らかに重そうなキンタマがついてて、陰毛がたっぷり生えてる。

それに触れ合った瞬間に熱さがまるで違うのを理解させられた。

そう……アタシのチンポがチンポじゃなくて『おちんちん』だってハッキリ理解させられて、心の中でもう白旗上げちゃった。

その状態で、限界まで高ぶったおまんこに——。

「っ ❤」

——数年ぶりのもの。

しかも、今回はあの頃の男子たちの『おちんちん』じゃなくて——。

「っ ❤」

——本物のチンポ。

逃げなきゃ、レイプされる、犯される汚される。

またあの頃みたいに便所穴扱いされる……ううん、それより何より、あの日、虐めから抜け出して以来数年間作ってきたアタシが壊され——。

”ずっとうう❤”

「おおお❤ きつついけど、いい穴っ❤ これ、そこそこ当たり、かもお❤」

「っ❤❤ っ❤ ～～～～❤❤❤」

——る。って言うか❤

壊され——。

「んっああああああああああ❤❤❤」

——ちゃった❤

チンポが押し込まれた瞬間腰を跳ね上げるようにして激しく絶頂。

初めてのおまんこでの絶頂に身体の痙攣が止まらない。

おまんこを締め付けながらチンポを、ううん、おちんちんをピコピコ無様に震わせていく❤

「はあああっ❤ だめっ、なにこれ、ああっあああ❤ 頭の、奥っ❤ んんっああああ❤」

「あ～❤ 真尋ちゃん、おまんこでイクの初めてなのかあ❤ カワイイねえ……❤ ほおら、ここ、チンポで擦られるとまた違うよねえ？」

”ぞりゅんっ❤”

「ひついいいといい❤❤❤」

ああっ❤ だめっ、なんでってくらい気持ち良い！

脳みそが焼けていく感覚。

虐められてた頃には一切感じなかった気持ち良さに、感覚が少し戻ってきた足をピンと伸ばしていく。

チンポがおまんこを擦る度に声が情けなく漏れて、時折、おっぱいを揉まれるとそれがまた気持ち良い。

「つあ❤ ああ❤ んあああ❤ あっ❤」

「うひ❤ 真尋ちゃんエロすぎっ❤ 可愛いし、こりゃ大当たりっ❤ どこまで感じれるようになるかなあ❤」

”ずつぶうつ❤”

「ひぐうう❤」

チンポが深く挿入されて、奥の未開発な部分を押し広げられると苦しくもあるけど、めちゃくちゃ気持ち良

い❤

おまんこの、お腹の奥を領地としてアピールされているような感覚、自分の身体なのに支配権を奪われているみたい。

その快感に酔いながら、身体を震わせて、女として、メスとしての自覚がしっかりと芽生えちゃう。

アタシって男寄りのフタナリだと思ってた。でも、違った。

全然違った！

「ああああ❤️ んくひいいい❤️」

チンポで刺激される度に情けなく喘ぐアタシが男の訳なんてない。

アタシはただ女に、メスにおちんちんがついただけの存在。

チンポには勝てない、逆らえないメス、おちんちん付きのメスだって完全に自覚しちゃった❤️

犯されて、おまんこを犯されながらおちんちんを尻尾みたいに振るアタシが男なんてありえない❤️

気持ち良さに悶えて、おまんこからマン汁垂れ流しのアタシが男？ 冗談でもりえない。

それを自覚しちゃうと、気持ち良さがどんどん高まっていく。

もう、一回、二回はイカされちゃってる。レイプでイク、そんな弱いメスがアタシ。

強がって格好付けて、そんなハリボテで固めたアタシが溶けていく❤️

”ぱんっぱんぱん❤️”

肉がぶつかり合う音が響いて、それに合わせてアタシの声もあがっていく。

もう我慢できない、気持ち良いのを知っちゃった、アタシはメスだって、女だって犯される側だって完全に

思い知らされちゃった。

「はああ❤️ 気持ち良いけど……ちょっと暑いねえ……お、そーだ、真尋ちゃんが良いのを持ってたよねえ」

「え？」

擦られて刺激される度に声をあげて、だらしなく感じていたら、男が何かを探るような動きをしていて、次の瞬間目の前に突き出されたのは——。

”プシュウウウ！”

「ぎあやあああ！？！？ げほっ！ けほっ！ ごほっえ！ おえええ！！」

「おお、結構な効き目……これならっとお❤️ ふー、暑かったなあ」

——アタシが持つてた催涙スプレー。

それを顔目掛けてかけられると目への痛み、喉、鼻の痛み！

目も開けられない、しばらく咳も止まらない状態。

咳が治まつても、目は開けられないでいて、苦しくて痛い状態なのに、改めて犯されだと貪欲に身体が快感を求めていく。

「ふぐっう ❤️ うう～❤️」

「お、催涙スプレー食らってもおまんこヒクヒクさせるって真尋ちゃんドスケベだねえ ❤️ 可愛いよお ❤️」

目は開けられないけど、痛みに慣れてきたら、あとはもう気持ち良さにすがるだけになっちゃう。

擦られる度に気持ち良くて、たまらなくて ❤️

深くおまんこの入ってくると、それだけで大きな声を「んああああ ❤️」なんて漏らしちゃってる。

何回も、何回もイカされて、完全になすがままになっているそこに——。

「じゃあ、そろそろこっちも、ねえ ❤️」

「え……え？ あっつつ ❤️」

——おまんこを犯されながらの、おちんちんシコシコ開始 ❤️

これは、ほんっとにつつ ❤️

「おちんちんつとつ ❤️ おまんこつあああ ❤️ 同時、だめつええ ❤️ これつ ❤️ の、脳みそつ ❤️ とけ
るつ ❤️」

「ほつおつ ❤️ 溶けて良いんだよおつ ❤️ フタナリちゃんなんてつ ❤️ 性欲お化けなんだしつ ❤️ エッ

チなことで脳溶けるなら本望だよ、ねえ？」

”ずつぶずぼづぼつ❤”

”ぬっちゅぬちゅ❤ シコシコ❤”

「ひぐううううううううああ❤ っくひいいい❤」

両方同時に責められる気持ち良さはとんでもなくて、おまんこもおちんちんも、気が狂いそうな快感。

身体をビクビク震わせて催涙スプレーのせいで目も開けられないままなのに感じまくっちゃう。

こんなことまでされても感じるアタシはメスって言うか……マゾメス❤

女としても最低な自分に気づきながら、腰を震わせて、カクカク震えて、そして——。

「あつあああああ❤❤ だめっ❤ いくっ❤ イクイクイクイクイクっ❤ 両方、いくううううう❤❤」

「うおつあとお❤ おまんこ、おお❤ 締め付け良い、ねえ❤」

「ひぐううううううう❤❤❤」

——おまんこが絶頂を迎えるに合わせるようにおちんちんも絶頂❤

”どっぴゅ❤”とザーメン溢れさせて、自分の顔にまで精液が届いてきちゃったのを感じる。

今日、何回も射精したし、カワイイ女の子も犯したのに、それより何よりも気持ち良い射精❤

本気で腰が抜けるような快感を味わいながらイッちゃって、それに合わせて男も「おじさんも出すよぉ❤」

なんて射精❤

「んあああ……ああ……❤ あああああ……❤」

「お……おお❤ かなり出たねえ、これ❤」

ゴムなんかつけてない生での挿入、そのままの射精。

昔何回もされた中出しだけど、それとは比べ物にならない気持ち良さと……後から気づいた幸せな感覚❤

犯されて、中出しされて感じまくる自分、不思議ともうしっくり来ちゃってた。

イキ過ぎて、スタンガンの痺れはほとんどないのに身体は動かないでいた。

アタシに中出しして満足した男は、手錠を外したりなんだりしてから最後に——。

「ああ、目が見えないと大変だよねえ……洗ってあげるねえ？」

「はあ……はあ……え？」

「ふいいい……❤」

”じょぼぼぼぼぼぼぼぼ……”

——アタシの顔目掛けてオシッコを引っかけていった。

顔にあたる生暖かいオシッコ❤

まるでアタシの顔を小便器か何かと勘違いしているような行為に怒りもわからない。

「…………ごくり ❤」

顔に当たるそれを少し飲み込んでみて、思った以上に拒否感がない自分に驚きつつも小さく笑う。

オシッコを出し切って満足したらしい男はそのまま去っていく。

そして、そのオシッコのお陰で少し視界が戻ったアタシは、ぼんやりと後ろ姿を見送った。

……。

…………。

…………。

その後、アタシはそのまましばらく倒れたままでいた。

そして、中出しされたおまんこを指でほじくって精液を指に着けて舐めたり、もう、その場でオナニーしたりと頭のおかしい行動しちゃってた。

でも——。

「ん……ああ……イケない、さっきは、あんなに……！」

——どれだけ激しく指を動かしてもイケなくてイライラが募った。

その後。何とか身体を起こして、荷物をまとめる。

財布もお金も結局取られてない、スタンガンも、スプレーも放置されてた。

それを雑に鞄に詰め込むと、オシッコ臭い顔のままフラフラと、おまんこから精液を垂らして家に帰ってシャワー浴びて、オナニーして寝た。

そして、何も変わらないように朝起きて、ママにおねだりさせて遊んだりして、電車の中で後輩にチンカス掃除させたりしていつものように過ごしていたんだけど——。

「っ！ これっ、なんっ……イケ、っ！ ないっ……！！」

——女の子を犯しても、物足りなさしか感じなかったアタシは家に帰ると、ポチで遊ぶように買ったバイブでオナニーしていた。

ベッドの上で仰向けになって、犯された時みたいに激しく、出し入れするけれどイケない。

「なんって、これっ！ あれより、太いの、にっ！」

何回も、何回も激しくズボズボと音を立ててバイブを動かしているのに中途半端なところで止まる感じがしていた。

二時間近くオナニーしても結局イケずに、イライラを募らせていく。

そんな日が続いて……玩具を乱暴に犯したり、虐めたり、ポチを壊そうとしたり、何したりしていく中で生まれた感情は——。

「ふーーー…………やられたらやり返す……やり返す……やり返す……！」

——かつて、虐めから抜け出した時に劣らない決意だった。

アタシはまず、この近辺で起きていたレイプ事件を全て調べた。

時間、場所、日にちをまとめていって更に、理事長などを使って詳しい内容も仕入れさせた。

アタシの通う女子高は名門、街の自慢みたいな扱いだから、そこの理事長が「生徒の安全のため」なんて言

えば警察も口が軽くなるみたい。

それに加えて、玩具たちにも「みんなを守るため」なんて言って他の学校の生徒たちからも情報を集めさせた。

事件として被害者が訴え出ているものと、レイプされたけれど泣き寝入りしているものを浮き彫りにさせていく。

レイプ事件は泣き寝入りになることが非常に多いから、正確な情報を掴むためにじっくりと収集させていった。

そして、数日かけて集めたデータをまとめていく。

「大体、15日に一回のペース、ここは一か月空いているけど、多分被害者はいる……それと、この街の次は隣のここ、そしてここ……時間は全部深夜……」

レイプ事件の詳細だけじゃなくて集めたのは学校や保護者相手へと流れる「不審者情報」

「公園の周辺で小太りの中年……ここにも、似たような情報が流れてる……こっちの市でも事件があった公園で……」

レイプ事件があった近くで不審者情報として挙がっている内容も吟味し精細していく。

「夜の時間の余裕、平日の昼間に下見……工場系、いや、バイト……コンビニとか？」

男の目撃された時間から色々と考えて予測していく。

決めつけてもし違ったらまた違う方向から考えれば良いだけ。

そして、行動半径を推測、レイプ事件のあった時刻、不審者情報、事件の頻度などなどから時間をかけて男の所在地を絞って絞って候補をいくつかあげたら——。

「えーっと、街の掲示板で……とりあえずここにも『あそこのコンビニで昼間働いてるおっさん汗臭くて最悪』っと」

——絞った候補の街、それぞれの街単位のネット掲示板に同じような書き込みをしていく。

スルーされたり「昼間っておばさんばっかりじゃね？」みたいな書き込みが続いている。

家のベッドで寝転がりながら更新を繰り返して繰り返して繰り返して——。

「きた……！！」

——ガバっと起き上がる。

アタシの書き込みに対して——。

221:名無し 2020/**/**

あー、郵便局近くのコンビニで、昼間行くと大抵いるおっさんか

汗臭いのもそうだけど、女の客をエロい目で見ててキモイ

——なんて書き込みがついた。

即座にその街の郵便局を調べて、そこにコンビニがあることを確認。

アタシは胸が高鳴るのを感じた、やられたらやり返す。

あんな惨めな目に遭わせてくれたあの男に、あのおっさんにやり返す、その気持ちを胸に秘めていた。

そして次の日、準備を終えたアタシは一人、バスで30分ほどの街に来ていた。

準備は万端——。

薄い茶色の髪は綺麗に整えてやや内巻き。

服は色々考えたけど結局制服、だけど胸元はやや緩めかつ小さめのワイシャツで胸の形をアピール。

スカートも下品にならない程度に短くして、下着も1時間かけて選んだ黒に白フリルの可愛い紐パン。

——完璧だと自分では思う。

肩からかけた鞄はブランド物の少しイイやつで見る人が見れば「学生が凄いの持ってるな」と思う値段のやつ。

誕生日に会長からプレゼントされたもの。

それを揺らして、ドキドキ、ドキドキと高鳴る胸を押さえながら、コンビニに向かい、チラッと中を確認すると男がいた！

アタシをあの夜犯したあの男が！！

身体は走るゾクリとした感覚、口の中に溜まった唾を飲み込んだ。

「時間的には多分、そろそろ退勤のはず……」

街の掲示板で知っているふりして書き込んで情報を仕入れた結果、あの男は朝から夕方まで働いているという。

時間は16時過ぎ、このまま待っていればいずれ出てくると、コンビニ近くでこっそり待機。

名門女子校の制服だから微妙に目立ってるけど気にしない、制服とアタシ自身も可愛い自覚はある以上、目立つのは仕方ないし。

「……………遅い…………？」

コンビニの入り口が見える位置で待機しているけれど、男が出てくる様子はない。

既に17時は過ぎている、掲示板での情報を思い出すと18時にはいないという内容だった。

なのに、なんで出て来ない？ 裏口があるタイプ？ だとしても道はこっちに続いているんだから……。

「……………」

色々考えるのやめて正攻法でコンビニに向かう。

ドキドキ、高鳴る胸を抑えきれずにいて、店内に入ると客は一人もいない状況。

その状況、レジにやる気の無さそうな男が一人いるだけ、あの中年男はいない。

ゆっくりと店内を回っていると、微かに声が聞こえてきた、叱責するような声？

その声の元を探していくとバックヤードに続く、関係者以外立ち入り禁止の扉、おそらく店員たちの休憩所や更衣所のある場所、そこから声は聞こえていた。

アタシは、そっとその扉を開けて中に入った。

部屋の中は商品の在庫などが沢山あり、そんなに広くもない場所のようだった。

そこに、男はいた！

「あのね、山口さんさあ、クレームとして入ってるのわかってる？ 目つきがいやらしいってこれ、もう犯罪だよ！？」

「はあ……」

髪を染めた若い、と言っても30代くらいの男に叱られているのは、アタシを犯したあの夜の男。

見れば見るほどしょぼいデブおやじ、年齢は40後半？ 叱っている男よりも明らかに歳はとっている、な

のに叱られているという状況。

「あんたさあ、そりゃ女にモテる訳はないんだろうけど、だからって客をそういう目で見るってどうなの？」

「あんたのせいでのうちの店の評判落ちてるの、わかる？　ねえ？」

「はあ……」

叱責と言うか、罵倒に入りそうなことを言っている男は多分店長、とか？

年下の店長に叱られる情けないバイトの中年、こいつがアタシを犯した男。

その光景をしばらく見ていたけど、話は続きそうだしこっちに気が付かないで声をかける。

「あの……」

「あん？　……キミ、誰？　バイトの面接とかなかったと思うけど……お客様？　ここ関係者以外立ち

入り禁止なんだよね（お、可愛い……）」

アタシの顔を見て目の色を変えた店長らしい男……それはスルーしておく。

視線を小太りの、山口さんと呼ばれていた中年に向ける。

一瞬驚いた顔してたけど、何を思ったのか露骨にニヤニヤしたいしたバカな男。

被害者に働いている場所まで知られて何ニヤニヤしてるの？　なんて呆れて、呆れて呆れながら——。

「ごめんなさい、遅いから迎えに来ちゃいました……❤」

「ええ～？ 真尋ちゃんは仕方ないなあ、そんなに僕に会いたかったのかなあ？」

——甘えた、生涯抱いたことのない媚びた声をさせながら男の腕に抱き着いて見せた。

まるで恋人のように擦りついて見せれば、店長の男は驚愕に目を見開いていた。

「は、え？ え？ は？」なんてアタシと山口という男を指さして理解不能って顔をしている。

そこに追い打ちをかけるように、ブランドバックから財布を取り出して三万円出すと、店長に差し出して頭を下げる。

「この度はお仕事中にご迷惑おかけして申し訳ありません、つい我慢できずにお邪魔してしまったお詫びにお納めください……」

「え、え？ え…………どゆ、こと……？」

理解不能が続いている様子の店長が金を受け取ったら顔をあげて、もう一度丁寧に謝罪をして頭をさげたら中年男に寄り添い、その肥満腹を撫でる。

撫でられている男は、完全に調子に乗っているみたいで、脂肪の乗った手でアタシのワイシャツの胸元に手を入れて、おっぱいをむにゅむにゅ❤揉んできた。

ここ数日だけで大きくなってきたいる気のするそこをまるで自分の物みたいに揉む男。

ニヤニヤしていて、完全に調子に乗っている。

全部演技で、これがあんたを捕まえるためのものだなんて想像もしていない都合の良い脳みその男に呆れるけど、実際何もない。

アタシは……この男が忘れられなくて会いに来ただけなんだから❤

「いやあ、真尋ちゃんは寂しがりやでねえ、ごめんねえ、店長お❤」

「僕に会いたくて会いたくて、今日もエロいことしたくて来ちゃったみたいだよお❤」

「は、え、えろ、は？」

中年男に乱暴に、雑におっぱいを揉まれるだけで気持ち良い……❤

乳首をコリコリされると、もう❤ 感じすぎちゃう。

店長はまだまだ理解できないまで、アタシに渡された三万円をクシャクシャに握っちゃっている。

多分、普段バカにして下に見ている中年男にまさか可愛い女の子が会いに来るなんて、って感じかも？

「真尋ちゃんは僕にエロいことされに来たんだよねえ？」

気持ち悪い笑みを浮かべてとことん調子に乗っている男。

おっぱいを揉まれながら、それに合わせて、乗ってあげる。

何て呼ぼうか少し考えてから甘えた声で——。

「はい❤ 真尋は”おじさま”にエッチなことして欲しくて来ちゃいました❤」

——子犬みたいにすり寄りながらの宣言❤

完全に沈黙した店長の前でおっぱいを揉まれて、そのまま山口……おじさまは「それじゃあ、お話終わりみたいでしお疲れ様でーす」なんてアタシのおっぱいを揉んだまま歩き出した。

アタシもそれに逆らわずにしっかり着いていって、店内の客ややる気の無さそうなレジの人の驚かれつつ店を出た。

そして改めておじさまはアタシを見下ろしながらニヤニヤと楽しそうに笑っていた。

「いやあ、まさかここまで来るとはねえ……しかも、警察も何にも言わずに……❤」

「……………❤」

店を出て周りを見回す様子のおじさま。

少しは不安に思ってのかな？ なんて考えながらおじさまに寄り添う。

片手でふくよかなお腹を撫でまわして、アタシはもう完全に、オスとしてのプライド0、ヤリチン気取りだった自分を捨てて——。

「お願いします…………めちゃくちゃに……女として生まれたことの幸せ、たっぷり教えてください❤」

「真尋はおじさまに絶対服従します……言いなりです❤ なんでもします、貢ぎます❤」

「だから、だから……❤ ああ…………❤」

——媚び切ったおねだりを夕日の中でしちゃった❤



蝶で固めた鳥の羽根
第六話
チン負け編

《蟬で固めた鳥の羽根 第六話・チン負け編》

「ほらあ、入って良いよお？」

「は……はいっ……❤」

おじさまこと、山口 敏郎（やまぐち としろう）さんの部屋にお招きして貰っちゃった。

あのレイプ”して貰った”日から、この短期間でCカップのブラがキツク感じるくらい育ったおっぱいを揉んで貰いながらやってきたそこ。

胸が高鳴るを感じて、こんな気持ち……多分初めて。

虐められる前は好きな男子とかいたと思うけど、その男子ともエッチは……してる。

あの頃のクラス、学年の男子の多くはアタシで童貞卒業したし。

だから、アタシにこんな風にときめく感情が残っているなんでビックリ……❤

連れてこられたのは今どきこんなのあるんだ……レベルのボロいアパート。

アタシの家はそれなりだし、遊び歩く玩具の家はとんでもないレベルばっかりだったから、なんか映画のセットみたいで興奮する？

「お邪魔……します……❤」

ドキドキ。

あんど。

おちんちんがピコピコ、下着の中で震えちゃってる❤

ああ……完全に犬、牝犬？ 子犬？ 牝子犬❤

飼い主を前にして大喜びで尻尾を振る犬状態❤

おじさま、敏郎さんの近くにいるだけでおちんちんは震えてピコピコ ❤

胸もドキドキして、何度もやや内巻きにしら薄茶色の髪を撫でながらお部屋の中に上げて貰う。

「…………❤」

部屋の中はおじさまの臭いでいっぱい、それだけでまた——。

”ピコピコ ❤”

——おちんちんが震えちゃっている。

狭いアパートの部屋、備え付けの狭いシンクにはラーメンでも作った後の鍋、お弁当のゴミ。

部屋の中にはエッチな漫画や雑誌、多分万年床のお布団、エロDVD、オナホ、きっとアタシの写真も保存

されているノートパソコン。

本当に大好きな男子の部屋に招かれたら、アタシは正常に生きてきたら感じていたかもしれないドキドキを胸いっぱいに感じていく。

そして、おじさまは着ていた服のまま布団の上にどかっと腰を下ろしてアタシをニヤニヤと見つめてくる。

アタシは少し考えてから、おじさまの前に膝について肩からかけていたバックを下ろして正座。

「ふー…………おじさ……敏郎さん、あの…………」

そして、そのままロクに掃除もされて無さそうな畳に額をこすりつけるようにしての土下座。

「もし、レイプでご使用の精液があるなら……あ、アタシで発散してくれませんか？ レイプより、安全…

…ですっ！」

「ぜったい、なにされても、全て受け入れますっ！ 敏郎さんの言いなりの女になります、から……❤」

「世界一都合の良い女に、オナホにっ……ダッチワイフになります……から……！」

「んひっ……❤」

必死に媚びて懇願。

こんな惨めなことってないはずなのに、頭は言葉を発するたびにクラクラしてくる。

おちんちんもずっとピコピコ震えているし、カウパーも凄い。

あたしはフタナリじやなくて、ただのメス、しかも最低のマゾだって自覚は濃くなる度に今までの自分の行いが滑稽過ぎで辛くなる。

玩具のあの娘たちの前でいい気になってた自分が間抜けすぎる……。

そんな気持ちに胸を苛まれていたらおじさまがノソリと立ち上がった。

頭を下げたまま、どうかしたのかな？ ダメだった？ なんて不安に思っていたら——。

”ふみっ！”

「んぐう……！♥」

——頭を踏まれた。

しかも、踏まれる直前にアタシの頭の真横に靴下が落ちてきたから素足で今、アタシは頭を踏まれている…

…♥

ご主人様なんて呼ばれて、真尋さまなんて崇められて、尊敬を集めていたカリスマ（笑）ヤリチン（失笑）
のアタシが……♥

「どおっしょっかなあ？ ほらあ、真尋ちゃんってさあ、可愛いけどフタナリじゃんかあ、出来損ないの女
にザーメンあげるのは、ねえ？」

「っ！！（出来損ないっ♥ 出来損ない……うんっ、アタシ、出来損ないの女、男でも女でもないっ……♥）」

踏まれながらの罵倒。

頭を踏み足は痛くない程度に体重をかけてきて、一層頭を踏まれているっていう実感だけを味わえる。

その状態で出来損ないの女、なんて言わるとおちんちんがビクビク震えちゃう。喜んでる♥

「は、い、出来損ない……ですっ♥ で、でも、何でもして大丈夫な、出来損ない、ですっ♥」

ああ、惨め、必死に使ってくださいとおねだりするこれ、すっごく惨め。

玩具の女の子たちが腰を振ってまでおねだりする気持ち凄くわかる。

自分を支配する相手に媚びるって凄くキュンキュンきてたまらない❤

スカートの中でおちんちんがピコピコしちゃって、カウパー漏れるのが止まらないでいた。

「ああ、そっかあ❤ 出来損ないの真尋ちゃんには何しても良いのかあ❤」

「は……い❤」

頭を踏まれているのに、頭を撫でられているような嬉しさと興奮に錯覚していく。

おちんちんという尻尾を振ると同時に、お尻もフリフリしちゃってる❤

とことんマゾ犬、バカ犬な姿を晒していって射精しそう。

出来損ないの女、出来損ないだから虐められて、今もまたこんな風に頭を踏まれて喜んでいる。

興奮に吐息が白くなるほど熱くなっている身体を震わせていた。

「それならあ、ま、暇つぶしに使ってあげても良いかなあ？」

「っ❤ あ、ありがとうございますっ❤ 出来損ない女にお慈悲を、あ、ありがとうございますっ❤」

「良いんだよお。僕は優しいからねえ？」

出来損ない呼ばわりされて、暇つぶしなんて言われているのに嬉しくてたまらない。

何度も頭をグリグリと踏まれてその心地よさに安心しちゃっていたら、その足がどかされた。

頭を踏んでいた足がなくなったことに寂しさを感じて「くうん……」と鼻を鳴らしちゃったアタシは、ゆっくり頭を上げる。

何をして貰えるのか、何をさせて貰えるのかとドキドキしているアタシは前におじさまはズボンを脱いで、脱ぎ捨ててまた布団にどかっと座った。

「それじゃ、まずはおしゃぶり、させてあげるよお ❤ チンカス溜まってるから綺麗にしてねえ？」

「…………❤ は、はいっ ❤ 頑張りますっ ❤ 」

おしゃぶりを”させて貰う”ことに喜んで自分でも目をキラキラさせちゃっている自覚はある。

頭の浮かぶのはアタシのおちんちんにむしゃぶりついてきた玩具たち。

バカみたいとか思ってごめんね？ 今になって本気で気持ちがわかる ❤

四つん這いで這いよって、座り込んだおじさまの股間、チンポ、アタシのとは大違いのそれを前にしたらヨダレ垂れてくる。

「すんすん…………ああ ❤ 臭い、臭い ❤ 汗……おしっこ……チンカス……オナニーの残り香…… ❤
くんくん ❤ 」

「真尋ちゃん、変態だねえ ❤ あ、撮影はするからねえ？」

「くんくんっ ❤ すーはーすーはー ❤ 」

頭を下げる、犬がするような臭い嗅ぎ。

撮影？ 好きにしてくださいって気持ちでもうチンポに夢中❤

鼻にツンとくる臭いがもうたまんない❤

外は夕方、かすかにどこかの家の夕食の準備の匂いとか子供たちの声とか、幸せの雰囲気が伝わってくるけど、それよりなにより今はアタシが幸せ！

何回も何度も臭いを嗅いで楽しんだら、その姿も撮影されているままに、まずはご挨拶——。

「おちんぽ、様❤ しゃぶらせて頂きます……ちゅっう❤」

「うお……お嬢様学校に行っているだけあって礼儀正しいねえ❤」

——とキス❤ 柔らかさたっぷりな唇でキスをしていく。

それも「ちゅっちゅ❤」と何度も何度も、何度もしたりない感情❤

じっくりキスをして唾液をつけたら、生唾を飲んで舌を出して舐めさせてもらう❤

「れろお❤ れる❤ れろれろ❤ えろれろお❤ れるるるう❤」

「お……うまっ……っ❤」

やった喜んでくれている！ それだけでめっちゃくちゃ嬉しくておちんちんピコピコしちゃっている。

今日の為に、一番フェラが気持ち良い、おっとり巨乳の麻依ちゃんのフェラを研究しただから！

まずは舌に唾液をたっぷり乗せて、あ、更にその前に口の中で唾液を溜めてぐちゅぐちゅしてネバっこくするのも忘れない！

そのネバついた唾液を舌ですくって、チンポにこすり付けるようにしていく。

まずはお掃除だけど、お掃除の段階から気持ち良いってことをアピール❤️

亀頭の半分くらいまで皮が被ったチンポ全体を舐めて、裏筋に舌を当ててゆっくり舐め上げていく。

「れるるるるう❤️ れるん❤️」

慌てないで、ゆっくりゆっくり❤️ チンポにもじっくりじっくり感じ貰うの❤️

アタシは、とってもおじさまのチンポが、オチンポ様が好きですってアピール？

言葉じゃなくて……態度で伝わったら良いな、なんて乙女な気分でうっとりして、気持ちの良い猫みたいに目を細める。

「ちゅう❤️」

「はああ……やっぱり、チンポついてると、気持ち良さがわかるのかなあ……きもちい❤️」

「……っ」

おじさまの言葉にピタッと舌を止める。

そこは聞き逃せない言葉だから——。

「真尋ちゃん……？」

「アタシのはチンポ、じゃないです……❤」

——這いつくばったまま片足をあげて、スカートを捲り上げて、今もバカ犬みたいに尻尾振っているおちんちんをアピール❤

「アタシのは……おちんちん、です❤ チンポは、おじさまみたいなのじゃなくちゃ……ちゅっ❤」

「んひ、ひひひ❤ そうだったねえ、真尋ちゃんはちゃんと立場をわきまえてるんだねえ❤」

アタシの態度におじさまは嬉しいみたいでニヤニヤ笑っている。

それにアタシも嬉しくなりながら、必死に震えて、ピコピコしているおちんちん見せつけつつおしゃぶり

❤

長さはそんなに変わらないのに、太さも、形も情けない、全然雄さがないアタシのおちんちん❤

こんなぶら下げてイキってたなんでほんっと恥ずかしい……！

だから、今のアタシに出来るのはチンポ様を名乗ってたお詫びのご奉仕くらい❤

「ちゅじゅる❤ 皮の中も……ん、ちゅ❤ ぞりゅ❤」

「お、お、お ❤ チンカス掃除まで……❤ 美少女のくせにっ ❤ ああ ❤ 顔と身体は良い、出来損ない女最高っ ❤」

「 ❤ ❤ ちゅじゅる ❤ ぞりゅう ❤ ひんかひゅ…… ❤」

皮の中に舌をしっかりと入れて、内側に溜まっているチカスのお掃除 ❤

何にも知らない後輩女子にやらせたり、理事長のやらせたりしてたから、それもわかっている！

玩具のみんなが教えてくれたテクニック、知識を活かしておじさまにご奉仕できる幸せ ❤

尖らせた舌を皮の隙間に差し込んで、くすぐるようにして皮の内側を舐めて、カリ首に溜まっているチカスをお掃除 ❤

「んちゅじゅるう ❤ 舌、しびれりゅ……じゅちゅう ❤」

舌が痺れる ❤

チカスの味に興奮しちゃって、美味しい訳ない、まずい、臭い、だけど興奮する ❤

おじさまのチカポのお掃除が出来る！ アタシもで役に立てているって気持ちでいたら——。

「真尋ちゃんのチカスお掃除良いねえ ❤」

”なでなで ❤”

「っつつ ❤️ ❤️ ❤️ ❤️ ❤️ (撫でられてる！ 撫でられてる！ ああっ ❤️)」

——おじさまが、お、おおお、おじさまがアタシの頭を撫でてくれる ❤️

それがとんでもなく気持ち良いっ ❤️ なにこれ、痺れるっ ❤️ 頭の奥からバカになるっ ❤️

ほんっと玩具たちの気分が凄く、凄くわかる……支配される気持ち良さ、見下される快感、褒めて貰えるお

漏らしそうな嬉しさ…… ❤️

これ、くせになっちゃう ❤️

”ピコピコ ❤️”

「ちゅじゅるう ❤️ れろれろお ❤️ んん ❤️」

足を上げたまま、おじさまにおちんちんフリフリを見せながらチンカスお掃除 ❤️

頭を撫でられると、なんか、もう、頭の奥痺れてたまらない ❤️

ほんとに何も考えられない感覚のまま、ねっとり、じっくり舐めていって、それを撮影されちゃう ❤️

「ふっは、あ…………はあ、はああ ❤️ チンカス……お掃除でき、まひたあ ❤️」

「うっわ、舌の上に、それ全部チンカス？ すごいなあ…… ❤️ 真尋ちゃんはチンカス掃除うまいねえ ❤️」

「えへへへえ～ ❤️」

チンカスお掃除を終えて、舌の上にこんもりとチンカスを乗せて見せると、アタシの狙い通りまた撫でて貰えちゃった❤

ああ……アタシに褒めて欲しくて援交頑張ってた玩具たち、バカみたいとか思ってごめん……これ、ほんと中毒性ある❤

脳のおくまで全部ピンク色に染まっているアタシはチンカスをしっかりと——。

「もぎゅもぎゅ❤ ごくんっ❤ はあああ……味、濃ゆい……あ、毛も❤ ぱっくん❤」

「真尋ちゃんは犬としては優秀かもねえ❤」

——噛んでから飲み込んで見せて、味わっていく。

口の端についていたチン毛もしっかり取って口に放り込んで見せたら、また褒めて貰えてうれしい……❤

チンポ、凄い、凄すぎ❤

女の子を虐める機能たっぷり❤

舐めててわかったもん、アタシじゃ勝てないって❤

「さあて……それじゃあ、真尋ちゃんのお待ちかねの行こうかあ❤」

「っつ！！」

お待ちかね！

その言葉を聞いてゾクリとする。

口元のニヤニヤが隠し切れない！

ここ何日も、ずっとそればかり考えていたおじさまとのセックス！

ああ！ ママ……真紀せんせー、理事長……ごめんっ！

我慢できないよね、チンポ欲しい気持ちを我慢するのって辛いよね……！

「はあはあはあはあはあはー❤ はー❤」

「ふひひ❤ 凄いね、ヨダレ垂らしてるよこのバカ犬❤」

おじさまが立ち上がって、アタシはどうしようかと思っていたら、その太い脚がおちんちんを踏んできた。

「きゃうううん❤」

限界まで興奮していたおちんちんを踏まれると気持ち良さにカウパーがビュッ！と漏れ出ちゃう。

気持ち良すぎてバカになる❤

快感に狂ったように叫んでいたポチたちの顔が思い浮かんでいく、多分アタシも今そんな顔している❤

気持ち良すぎて狂うって本当にあるのかも？ なんて思っちゃいながら、カウパーと一緒におまんこからも汁が漏れちゃう。

そして、制服の上着だけ脱いで、ワイシャツとスカートの姿になつたらおじさまの為に選んだ下着を脱いで、

お股を広げるおねだりポーズ❤

「はあ❤ はあ❤ チンポ……ちん……ぽ❤ チンポ❤」

「真尋ちゃあん？ チンポとしか言えてないよぉ？」

「っ❤」

もう、ロクに言葉も出て来ない❤

そして、足を広げて既に蕩けているおまんこを晒していると、おじさまはアタシの足の間に座ってそのチンポを改めて見せつけてくる。

立派なチンポがおまんこに来る前にまずは、アタシのおちんちんにご挨拶してくれた❤

「あ❤（凄い、熱い❤ やっぱり太い❤ 舐めててわかったけど臭いも違う！ キンタマずっしり❤ 好き好き❤ 好き❤）」

ピタッと長さを図る様に押し当てられて、思い知らされるこれ❤ 好き❤

アタシのおちんちんじゃおじさまに勝てない、チンポには絶対勝てないんだ❤

そう思い知らされるのがたまらなくて……❤ 気づいたら犬の服従ポーズ❤

お腹を見せて、尻尾……おちんちんも必死に揺らして媚びちゃってる❤

おじさまの立派なチンポには出来損ないのアタシじゃ敵いませんって❤

「もう我慢できないみたいだし、チンポ入れてあげるからねえ？」

「はっ❤️ はいっ❤️ よろしく、お願ひ、しますっ❤️」

おちんちんに押し当てられていたチンポが下に滑ってきて、そのままおまんこの押し当てられると、それで
けでカウパーもマン汁もお漏らし❤️

何日も待ち望んだチンポ❤️

これ欲しさに必死におじさまを探したんだから！

自分でオナニーしても全然イケなくて！

頭がおかしくなりそ——。

「よっと、お❤️」

”ずつぶう ❤️”

「っっっっ～～～～～～～～ ❤️ ❤️ ❤️」

———つ ❤️

思考が一瞬で全部飛ぶ❤️

頭の中真っ白になる快感、気持ち良さ❤️ 热さ❤️

もう、アタシのまんこにおじさまのチンポ、ベストフィット過ぎっ❤️

このメスを犯すためのチンポ、おじさまの立派なチンポが深く入っただけでイっちゃった❤️

あんなに、何回バイブで擦ってもイケなかったのに一発❤️

「あああああ❤️ あ～❤️ あっ❤️ いっ❤️ いっくっ❤️ いくううう❤️」

「んお❤️ おまんこ、締め付けてきてるねえ❤️ 真尋ちゃん、イキ易すぎだよお❤️」

一発でイカされちゃって、おちんちんもピコピコ大喜びでカウパー漏らしている。

おまんこだってキュンキュン締め付けて、必死におじさまをチンポを喜ばせようとしちゃっている❤️

「おああああ❤️ あっ❤️ あひいい❤️ んああ❤️ チンポっ❤️ チンポ、すごっ❤️ これ、これええ
❤️」

チンポがおまんこを擦る度に、ヒダヒダがめくれ上がる気持ち良さ、アタシのおまんこのことを知られてい
る腰使いに脳みその奥で電気が走っていく。

おじさまのチンポから与えられる快感だけが全てになっちゃっていて、痙攣するみたいに身体を震わせて
いく。

「ほら、ほらほら、ほらあ❤️」

”ずぼっ❤️ ずっと❤️ じゅぼっ❤️”

「ふにゃああ❤️ ふっか❤️ あああ❤️ チンポっ❤️ んにいい❤️ あああああ❤️」

おちんちんを揺らして滅茶苦茶に感じまくって、マン汁が何度も噴き出していっちゃう❤️

お隣の部屋から「うるせーよ！ 音量下げろ！」なんて怒鳴り声と壁ドン（本来の意味）の音が聞こえてきたけど、気にしてられない❤️

奥を擦られる❤️ 入り口近くを狙われる❤️ 何をされても気持ち良すぎでやばい❤️

「あ～❤️ 真尋ちゃんのせいでお隣さんに怒られちゃうねえ❤️ つお❤️」

「ごえんなひやいつ❤️ でも、っ❤️ 我慢、無理っ❤️ んいいい❤️」

何回もイッテイッテ❤️ もう何回目かもわからない絶頂を貪っていたら——。

「さすがに煩いよお❤️」

”ずっしい！”

「ふぎゅ！？」

——おじさまが体重をかけての種付けプレス❤

肥満体で押しつぶされて苦しいんだけど、身体が重なり合うともちろん、おじさまの身体にアタシのおちんちんが触れちゃって——。

「いっく❤ ああああ❤ んつああああ❤」

「え？ あ、射精してる？ あ～、お漏らしやめてよねえ？」

「はつあああ❤ ごめん、なひやい❤ ひい❤」

——射精しちゃった❤

おじさまのお腹、でっぷりした腹コキで射精しちゃう❤

その状態でおじさまが身体を動かすと射精して敏感なおちんちんが擦られて頭の奥まで痺れるくらい気持ち良い❤

おまんこを犯して貰うだけでも気持ち良いのに❤

おちんちんも同時にお腹で擦られると本当に脳みそ蕩けていくのを感じちゃう❤

「あつあ❤ あひいい❤ あぐう❤ おちんちん❤ おまん、こお❤ んんんんう❤」

「あーあー、人のお腹でオナニーしないでよねえ❤」

「ら、らってえ❤️ きもちい❤️ おじさまのっ❤️ お腹コキっ❤️ やばい❤️」

ザーメンと汗をローションにしたお腹コキ❤️

おまんこもズボズボされちゃって❤️

「ひぐうう❤️ あああ❤️ も、だめ、気持ち良すぎっ❤️」

また隣の部屋からの壁を叩く音と怒鳴り声❤️

でも、それよりなによりも気持ち良くてたまらない❤️

おじさまの太い腰に足を回して、絶対に離さない❤️ チンポ入れ続けてっておねだりしていく。

「っ❤️ あ、こんなに締め付けられると、お❤️ しばらくしてなかつたし、出るっ❤️」

「あ❤️ だひ、て❤️」

「本当はっ！ 女の子に出すはずのザーメンっ❤️ 出来損ないの真尋ちゃんに、出してやるんだからねえ
っ❤️」

「っっっ❤️」

ずっとぽづぽ❤️と音を立てて激しく腰を振られると、一回一回でイキそうになっちゃう。

気持ち良すぎて呼吸が出来ないところで、体重をかけた種付けプレスされているから、意識も朦朧としていく。

その瞬間に出されたザーメン、熱さをはっきり感じる快感❤

射精に合わせるようにまた、アタシも射精するけど、おじさまのチンポに比べたら本当にお漏らしみたいなもの。

「ふつう❤ ふー❤ 真尋ちゃんの、出来損ないおまんこ、いい……❤」

「んぐうう❤ はーはー❤ はっあ❤」

体重をたっぷりかけての種付けプレスは完全にアタシの身体を押しつぶしていて骨が軋む。

その気染みすら気持ちなくて、チンポが震える感触も伝わってきて、それすら感じちゃう。

骨の軋むミシミシという音を聞きながら、中出しの余韻に足をピンと伸ばして絶頂しちゃう❤

それでも、まだ足りなくて、おじさまの身体を抱きしめて——。

「あ、あの、もう一回、お金払う ”ドンドン！！” か、ら？ ん？」

「あー、怒らせちゃったかなあ？」

——もう一回をおねだりしようとしたら、部屋のドアが乱暴に叩かれた。

なに？と思っていると「うるせえって言ってんだろ！」だとか「オナるくらい静かにやれよ！」「音量下げ

ろ！」なんて怒鳴り声が聞こえてきた。

おじさまはそれに少し困ったような顔をすると身体を起こしていく。

そうなると、おじさまのお腹にたっぷり射精しちゃってて、アタシのザーメンが糸を引いていく。

それを「あ～あ……」なんて笑っているおじさまが”ぬぼ”っとチンポを引き抜くとアタシに「ほら、真尋ちゃんが五月蠅くしたんだから出て出て！」と促してきた。

チンポを引き抜かれた寂しさに少し困り顔をしつつも、何とかしないと二回戦は始まらないそうだしとフラフラ立ち上がった。

足にまだ上手く力は入らないけど、気持ち良さに顔を緩ませて、汗で張り付いた髪を軽く整えて、歩きつつ制服も直す。

自分で出したザーメンがついちゃってるけど、今更気にしないで、まだドンドン叩かれているドアのカギを開けると——。

「おっさん！　AV観るならイヤホンつけろって…………は？」

「あ…………その、う、うるさくして、ごめんなさい…………」

——そこにいたのは、黒いシャツを着たデブめだけがっしりした金髪のお兄さん？　20代くらいの人。

怒り顔だったけど、アタシを見てポカンとしている。

ワイシャツのボタンは三つ外れてて汗ばんでいて、谷間も見えている。

服は乱れ切ってどう見ても事後、エッチした後のアタシを何度も見つめて「デリ？　いや、可愛過ぎね？」

なんて言ってた。

怒りはどこかに行っちゃったみたいで、それを見て安心したのか、アタシの後ろからおじさま登場。

「いやあ、黒田くん、ごめんねえ？」

「あ……山口、さん、あー、デリ……？」

怒りが収まったとうか、面食らっている男性、金髪でがっしりのお兄さんは黒田と呼ばれていた。

そして、アタシを指さしながら「デリ」つまりデリバリーヘルスか？なんて聞いていく。

それには答えずにおじさまはアタシの肩を抱くように腕を回すと、汗ばんだ手でおっぱいを掴んでくる。

「あ ❤」

多分Dカップくらいにまで成長しちゃっているおっぱいを雑に揉まれるだけで腰がカクンって震えちゃう
❤

おじさまは多分、アタシに言えと、自分との関係を言えって言っている、だから——。

「あ、アタシは、デリヘルじゃなくて、その、えっと……」

少しだけ迷って ❤

「おじさまの、いい、言いなり、お便所女、です ❤ おじさまがなんでもして良い、便利な、便女、です

」

——なんて言っちゃった

流石にアホみたいな下品な言葉に黒田さんは面食らって「はあ？」なんて言ってた。

「こんな、めっちゃ可愛い娘が、え、なんて？」

「おじさま、や、山口敏郎さんの、言いなり便女……です」

「うっそだろ……（マジか、え、ドッキリ？　だって、この娘、めちゃくちゃカワイイじゃん……）」

驚きっぱなしで玄関で立ち尽くす黒田さんを見て優越感を楽しんでいるみたいなおじさまは、ニヤニヤ笑ってアタシのおっぱいを揉んでいく。

その上で、更に優越感を楽しむためか、アタシが本当に言いなりなのかを確かめるために「お詫びに一発抜いてあげなよお」なんて言ってきた。

だから、アタシは——。

「じゅるちゅっ　じゅっぴゅるる　じゅちゅるう」

「くっはあ　この娘、めっちゃフェラうめえ　山口さん、どこで捕まえたんスか、こんなの！」

「ん~、逆ナンされたって感じ、かねえ？」

「！？ パネエ！」

——玄関で黒田さんのチンポをおしゃぶりしちゃってる❤️

立った彼のズボンを下ろして、そのチンポ、これもアタシのと長さは変わらないけど、立派なチンポ❤️

臭いも濃ゆくておいしい、かも ❤️

それぞれの味、形の違いを楽しむ余裕まで出しながらしゃぶっていく。

頭を揺らして「じゅぱじゅぽ❤️」下品な音を響かせてのフェラ ❤️

おじさまはアタシの使い方、優越感の楽しさにハマりだしてるみたい、きっと他の男に抱かれることも多く

あると思う。

それに期待しているアタシもいて、またおちんちんを尻尾みたいに揺らしちゃっていた。

「あ、やべ、もー出るっ、マヒロちゃん、飲めよっ！」

「んぐうう❤️ んんっ！」

乱暴のチンポを突きこまれて射精されていく。

どくどくと脈打つチンポから吐き出されるザーメンを受け止めて、おじさまとの違う味を舌の上で転がしていく。

もう、アタシの中のオスの部分なんてそんなもの存在しないことを感じながら、「げふう❤️」とザーメン臭

いゲップをしてしまう。

黒田さんはニヤニヤ笑いつつ、おじさまに「今、2万なら出せるんスけど」なんて交渉をしだしている。

ああ、アタシ、おじさまの為に身体を売らされることにもなるのかも。

それを予感して、おじさまが楽しむための玩具になることの興奮に身震いをしていた。

.....。

.....。

.....。

「んぐっうがっ！！ かひゅっつ！！」

「あ～、今日は嫌な客きたなあ……そんなときはあ、真尋ちゃんとのエッチが癒しだよねえ？」

あれから数日。

おじさまの家に入り浸る様になっているアタシ、学校が終わると即座におじさまの元へ駆けつける忠犬っぷり。

学校では玩具相手にエッチはするけど、全然楽しくなくて、むしろ立ちすら悪くなって心配されてる。

そんなアタシも、おじさまのことを思うとおちんちんはビンビン❤

そして今日も、バイト終わりのおじさまとのエッチなんだけど、今は手を後ろで縛られてのバックハメ❤

しかも、首には細い紐が食い込んじゃっている。

呼吸がほとんど出来ない状態で犯されている、命を弄ばれている感覚におちんちんは大喜びみたいで震え

てカウパーを垂らしていく。

おじさまのストレス解消に使われるのも当然になっていく。

このままエスカレートしていったらどうなるの？

そんな不安と期待の中、首に食い込む紐により、意識が遠のいていく—————❤

蟻で固めた鳥の羽根

最終話

《蟬で固めた鳥の羽根 最終話》

あれからアタシはおじさまこと、山口 敏郎（やまぐち としろう）さんに飼育？ 調教？ 遊んで貰つてるの❤️

ああ、もう、好き勝手身体を弄ばれて尊厳を踏みにじられるのが気持ち良い❤️

人権とか人格を無視されたことをされることが最高にアタシを興奮させてくれるようになっちゃった❤️

もう……多分、アタシはダメなんだと思う……。

ママや玩具たちが求める「ヤリチンドＳのふたり女王様」には戻れない、と思う。

頻度は減っているけど、玩具を抱いても全然……気持ち良くて興奮は出来ない。

めちゃくちゃカワイイアイドルみたいなお嬢様を好き勝手に犯すよりも——。

「真尋ちゃん？ 早く腰振らないと死んじゃうよぉ？ ほれほれえ ❤️」

「んぎぐっううう ❤️ ❤️ が、んぱり、ま……ひゅつ ❤️」

——おじさまの上で腰振っているほうが幸せ ❤️

今も、汚くて狭いアパートの万年床の布団の上でアタシはおじさまの上に乗って全裸でガニ股騎乗位 ❤️

背中を向けるようにしたアタシの首には紐が一本結ばれていて、それを引っ張れば当然首が締まる。

それをおじさまが戯れに引いてアタシの呼吸を奪っていく中で必死に腰を振っていく ❤️

おちんちはカウパー垂らして、こんなことされてるのに大喜びでピコピコ揺れちゃっている ❤️

情けないマゾ犬 ❤️ マゾ牝犬 ❤️

「かっは……！」

首に食い込む紐によってロクに息も出来なくなっていく。

それでも、アタシは必死にガニ股で腰を振っていくの❤

アタシの命すら玩具扱いにされていく❤

”ぎゅううう……！”

「ぐっひいいい……ひい……❤」

首に食い込む紐によってアタシの呼吸は奪われてゆっくりと目の前が暗くなっていく感覚。

もう、何回もされて慣れてきたけれど、それでも苦しくて気持ち良い瞬間❤

おじさまの「お、締まる締まる❤」なんて声が嬉しくて仕方ないの❤

だって、今アタシの身体は完全におじさまの玩具❤ オナホ❤

自分の手でぎゅって握って締め付けをキツクしているオナホと何にも変わらない。

首を絞めて、それでアタシのおまんこがきつくなっていくのを楽しんでいるんだから❤

「はっあ……！ あ……❤ ん……ひゅー❤ ひゅー❤」

「んひひひ❤ 真尋ちゃん死ぬう？ 死んじゃうのかなあ？」

「いぎ……❤」

呼吸が出来ないままに必死に腰を振っていく。

おちんちんをピコピコ揺らして濃ゆいカウパー漏らしながら、最近ドンドン育ってきて困っているおっぱいを”たゆたゆん❤”揺らしていく。

必死にガニ股で腰を振って、目の前が真っ暗になって—————。

「——あつ！？」

——意識が飛んでた！

布団の上に倒れている感覚に慌てて身体を起こすと、そこにはおじさまがタバコ吸ってた。

アタシは慌てながら布団から降りて、畳の上に膝をついて——。

「ごめんなさいっ！！　おじさまのオナホの分際で、勝手に意識なくして、ごめんなさいっ！」

——必死に土下座で謝罪をする。

それはもう本気の謝罪、首に紐の痕をつけたままというか、未だに紐を巻き付けたまま。

「だ、だからっ、す、捨てない、くださ……い……」

額を畳にこすり付けるようにしての本気の謝罪。

おじさまに捨てられたら生きていけない！ そんな本気の気持ちを込めた土下座をしていたら、首に巻かれた紐がグイッと引っ張られる。

「ぐえ！？ っ…………」

「真尋ちゃんさあ、勝手に気絶とかして良いのかなあ？」

「ごえんなっ……ひや、い……！？」

首に紐が食い込んで、呼吸がまた出来なくなる。

もう、最近これを良くしているからネックウォーマーつけるのが日課になっちゃった❤

おじさまに付けられたキスマークみたいな？ そんな感じ❤

今も首を絞められているのに気持ち良くてたまらない……❤

おちんちんがずっとピコピコしちゃってカウパー垂れ流し状態❤

ああ……❤ 死にそう❤ おじさまに殺される❤

玩具みたいに扱われて殺されちゃう❤

「く……ひい…………❤」

「あーあー❤ 死ぬかもしないのにだらしない顔してるねえ❤ 美少女台無し❤」

「ひぐ……う ❤」

アタシは正座の姿勢のまま、頭だけ引っ張られていく。

けど、布団には上がっちゃダメ、謝罪しているときはそのまま。

だからどんどん首に紐が食い込んで、また意識をなくしそうになっちゃうんだけど、ギリギリで手を離して

貰えた ❤

「けほっ！ げほっ！ けほっ……！ あ、ありがとう、ござい、ます……❤」

「今日はこれで許してあげるよお ❤ ほら、お金おいて帰りなよ ❤」

「あ……はい…… ❤」

許してくれた……優しい…… ❤

なんて、ちょっとポーっとしちゃいつつ、鞄を手に取ると中に入れておいた封筒を取り出してそれを頭を下げて差し出す。

「今日も……出来損ないのマゾ牝犬を使ってくださってありがとうございます…… ❤」

「んひひひ ❤ こんなことされてお金払うなんて真尋ちゃんってほんと最低の変態だよねえ ❤」

ああ……❤️ おじさまに搾取されてる……❤️

酷いことして貰ってそのお礼に差し出5万円❤️

めちゃくちゃにされながらもお金を差し出すこの行為がたまらない❤️

でも、これって玩具たちに稼がせたお金なんだよね……出来ればアタシでお金稼ぎして欲しい……❤️

おじさまに都合良く使ってほしい。

そんな願望を日に日に募らせていく。

もちろん、おじさまには色々たっぷりと使って貰っている。

おじさまのバイト先のコンビニで臨時バイトとしてリモバ入れたまま働いたり ❤️

パチンコ売ってるおじさまのチンポをしゃぶらせてもらったり ❤️

ああ、アダルトショップでバイブ買ってその場で入れたりも ❤️

おじさまのお友達とエッチもさせて貰っちゃった ❤️

他にもいっぱい、たっぷり色々させて貰って ❤️

おじさまのチンポをおまんこの奥まで入れて貰える幸せを噛み締めまくり ❤️

もっと媚びて、もっと使って貰いたいって願って結果 ❤️

.....。

.....。

.....。

「あ、始まってる？」

いつものおじさまの部屋❤

アタシは白のマイクロビキニに首輪、それに口元を隠すマスクをしてライブ配信中❤

ビキニからなきなくおちんちんをはみ出させて、最近8.5センチにまでなっててびっくりしたおっぱい
を揺らしつつカメラに向かって手を振る。

「みなさいん❤　こんにちんちーん❤　ドスケベメス犬まひろのスケベちゃんねる14回め始めるよー¹
❤」

どう見ても頭空っぽ、ポチを思い出すようなテンションでのライブ配信開始。

これももう14回目になる『ドスケベメス犬まひろのスケベちゃんねる❤』というおバカなタイトルの配
信❤

毎回、あたしがおじさまに可愛がって貰って恥を晒しまくる放送なんだけど結構人気で、おじさまもお金が
入って大喜び❤

アタシは口元のマスクだけど、待機しているおじさまは、レイプの時に使ってた目出し帽をかぶってる。

そんな状態で放送開始、まずご挨拶するとどんどん視聴者は増えていってあっという間に1000人単位。

自分で言うのもなんだけど、結構可愛くておっぱい大きい女の子、しかもふたなりが恥知らずなことやりまくるから結構人気なんだよね。

今日も色々とおじさまに遊んでもらえる喜びにおちんちんはピコピコ大喜び❤

おじさまに遊んで貰えて、それで稼いだお金を貢げるとかほんとに幸せ❤

『お、待ってました！』　『相変わらずカワイイ❤』

『おちんちんはみ出てるwww』

『まひろちゃんオフ会まだ？』　『今日は何すんの？』

「今日もたーっぷり恥を晒しちゃうから期待しててください❤　真尋は常にドスケベの変態なので❤」

沢山の人の見られている興奮におちんちんを揺らしつつおじさまをチラ見❤

今日はこの後何をされちゃう？　どうされるのかな？　そんな期待に胸が高鳴っていく。

.....。

.....。

”ごっ！”

「おぐえ……っ！！ っ❤」

「んひひひひい❤ ほらあ、わかるかなあ？ 真尋ちゃんって変態すぎて、腹パンでも感じるんだよお？」

色々やっていく放送の中で、今アタシは布団の上で立って腕を後ろで組んでお腹を晒してそこをおじさまに殴って貰っちゃってる❤

いわゆる腹パン責め❤

「並みのマゾじゃ無理だけどお❤ 真尋ちゃんみたいな最低のサンドバックマゾならっ！」

”どごっ！”

振りかぶったおじさまの拳がアタシのお腹に突き刺さって、その刺激が子宮を叩く❤

お腹の奥で眠っているような子宮を無理矢理たたき起こされる刺激❤

”きゅんっ❤”

「ふぐううう……❤」

痛みと苦しさだけじゃない快感が身体に走ってたまらないの❤

それを証明するみたいにビキニからはみ出てるおちんちんは勃起してピコピコ❤

カウパー垂れ流しの情けない姿を見せて、実際アタシは感じまくり❤

おまんこも濡らして、ビキニに染みを広げていっちゃう❤

『マジで感じてるんだ』 『こんな変態いるんだなあ』

『腹パンで感じるの？』 『マゾ過ぎっ❤』

『真尋ちゃんほどの変態みたことない❤』

「かはあああ……❤」

気持ち良い❤ 子宮を殴られて身体の奥の弱点を無理矢理に刺激される快感❤

足に力が入らなくてガクガク震えるほど気持ち良くてその震えでおっぱいがゆさゆさ❤揺れちゃってる

❤

おちんちんもずっと粘っこいカウパー垂らして、もう完全におじさまに服従しちゃっている❤

都合よく、お金稼ぎの道具にして貰えている喜びもあって興奮しているところにまた――。

「ほおら❤ もういっぱいつっ❤」

”ごっ！”

「っつ！？ げほお……！ ……っ❤ ごれっ……ぎぐっ❤」

——握られたおじさまの拳がずっと深くアタシの子宮を捉えていく❤

その刺激だけで射精しそうになってたんだけど❤

ギリギリ耐えていたところに、おじさまがもう一回拳を握って——。

”ごりゅっ！！”

「ひぎい！！❤ つ❤ つあ❤ ❤ ❤」

——アタシのお腹に❤ おちんちんごと子宮を❤ 思いきり殴ってきた❤

おじさまの拳と子宮に挟まれるようにしたおちんちんにその刺激に我慢なんて出来なくて❤

「ふみやああああああああ❤ ❤ いくつ❤ おちんちんいくううう❤ あつ❤ 無理、ああああ❤」

”ぶびゅうう❤”

精液を思いっきりお漏らし❤

おちんちんとお腹を殴られて、お腹には痣をつけながらの本気のマゾイキ❤

膝について、身体を丸めるようにして腰をカクカク振っちゃう❤

おちんちんからは今も断続的に精液噴き出しちゃってる❤

『うつわ本気でいってる？』 『こんな変態そうはいないだろ❤』

『あー、真尋ちゃんマジえろ！』 『犯してえ……』

『腹パンしながらチンポ入れたい』 『殴られてのガチイキとか、マジかよ』

「はあ……あ❤ ああ……ふあ……あ❤ ああ❤」

何千人にも見られて笑われての配信❤

お金もどんどん入っていて、アタシが恥を晒して、それでおじさまに貢げるんだから本当に幸せ❤

気持ち良すぎて意識飛びそうな感覚のまま配信を続けていく。

何度もイカせて貰って、無様な姿を晒して❤

もう、アタシの中でおちんちんなんて完璧におまけ、これで誰かを犯したいなんて気持ちはない。

おじさまに弄んでもらうための一つのパート程度の認識❤

もっと……❤ もっと❤ もっと❤ もっとアタシを弄んで可愛がって玩具にしてつつ❤

.....。

.....。

「じゅるるじゅちゅる❤ じゅるる❤ じゅちゅるるる❤」

「ふいいい……❤️ あ～、いいねえ……❤️」

それからしばらくして、ほとんどおじさまの部屋に入り浸っているアタシ❤️

今日は全裸で、昼間っからおじさまのチンポおしゃぶりタイム❤️

布団の上にどっかっとすわったおじさまの臭いチンポを音を立ててしゃぶっていく❤️

そのおじさまはアタシで稼いだお金で買ったテレビの画面を楽しそうに見ているんだけど——。

『あ、はい、ふたり、です❤️ このピアスは、えへへ❤️ 飼い主様の趣味で……』

『はいっ❤️ このビデオもおじさ、飼い主様の希望です❤️ ギャラは全額貢ぎますっ❤️』

『飼い主様大好きなんです❤️ もう一生お仕えしたいくらいラブくて❤️』

——そこに映っているのはアタシ❤️

肩を超えるくらいに、薄茶色の髪を伸ばしたアタシのデビュー作？

『ふたりマゾの美少女お嬢様』そんなキャッチコピーのついたタイトルで発売されたA V ❤️

インタビューで言っているようにギャラはおじさまに全額貢いじゃった❤️

アタシはおじさまに搾取される人生で良いの❤️

そしてピアスって言うのは——。

「じゅるるる……ぷはああ……❤️ おじさまあ、そろそろ……❤️」

——チンポから口を離して身体を起こすと、たぷっと揺れるアタシのおっぱい❤️

そこにはリングピアスが通されている❤️ おじさまからのプレゼント（お金はアタシが出した）

このピアスがあるからもう最近ではほとんどしなくなった玩具とのエッチのときも服は脱がないの❤️

こんな身体見せられないから❤️ もう、完全におじさまのメスになった身体で媚びていく❤️

お決まりの犬の服従ポーズ、お股を広げておねだり❤️

ねっとり濡れたおまんこを指で広げるていると、おじさまの太い脚が座ったまま持ち上げられて、そのかか
とが——。

”どすんっ！”

「ひぎい❤️❤️」

”びゅるるっ❤️”

——アタシのおちんちんと子宮を潰す様に振り下ろされると、もうそれだけで当たり前に射精❤️

ザーメンを一気に噴射しちゃってセルフ顔射❤️ おじさまのとは違う、情けない精液をペロリと舐めてい
く❤️

「はああ……❤️ おじ、さまあ❤️ チンポ……❤️」

「あ～、もう、仕方ないなあ❤️ せっかく今話題の美少女A V女優の処女作観てるのに❤️」

「ごめんなさい……でも、映像のアタシより本物のアタシを、観て？ いじめて❤ なんでもするからあ

❤」

チンポをピンピンにさせたおじさまは舌なめずりしながら近寄ってくる❤

また犯して貰える❤ その興奮に鼻息を荒くしちゃう❤

もう、アタシの頭の中はおじさまに犯して貰うことそれだけ❤

「オチンポ❤ ください……❤ また、気絶するまで犯してください❤ 出来損ない女の真尋をチンポ

で可愛がってくだ、さい❤」

「あー、もう、仕方ないねえ❤」

”ぬちゅ❤”

お股を開いたアタシのおまんこにおじさまのチンポが触れる❤

それだけでアタシのおちんちは嬉しくてピコピコ❤

さっきザーメン噴き出したとは思えないくらいに元気に揺れちゃっている❤

そのまま、おじさまが体重をかけてくれてその立派なチンポが——。

”ぬつぶう❤”

「ひああああ❤ チンポおつあ❤」

——深くまで一気に入れて貰えちゃうと足をピンと伸ばして軽くイっちゃう❤

オチンポにおまんこの奥まで支配されて、アタシはメスなんだって実感できるこの瞬間が大好き❤

「はあああ❤ ああ❤ おじ、さまああ❤ ふか、っ❤ んんんん❤」

「っとお❤ まだ、締まりは良いねえ❤ 緩くなったら、売りだけさせて、抱いてやらないから、ねえ？」

「しょ、しょんにやああ！ アタシ、もうおじさまのチンポなしじゃダメなのにいっ❤」

奥まで入ってきたそれを必死に締め付けながらおじさまの体重を受け入れる。

身体が軋むような種付けプレス❤ ずっぷりと奥まで押し込まれたチンポの気持ち良さにクラクラしちゃいながら、捨てないでって懇願。

もう、アタシの身体はおじさま無しじゃ成り立たないもん！

必死におまんこを締め付けてチンポにご奉仕❤

「それならっ❤ ちゃんと、お❤ おまんこ、締め付けておくんだよおっ！」

”ずぼっ！ じゅぼっ！ ぬっふ❤”

「んあっあはああ❤️ はいっ❤️ かしこまり、まひたああ❤️ おまんこ、トレーニングしておき、ますうう❤️」

おじさまの強いピストン❤️

身体全体を使っているような激しい腰使いがもうたまんない❤️

子宮を何回も小突かれて、おまんこのヒダヒダを擦られて何回も声をあげて何度もイク❤️

チンポから与えられる快感が全て気持ち良くて、アタシの身体はもうだめ❤️

「ほらほらっ❤️ ほらあ！」

「ああっ❤️ おじさまあ❤️ あああ❤️ イイ❤️ きもちいっ❤️」

おじさまの太い身体に抱き着くようにして足で、腕の力で密着❤️

たるんだお腹におちんちんを擦りつけちゃって、その気持ち良さでまた射精しちゃってる❤️

もう、アタシの身体はおちんちんもおまんこも完全にバカになってる❤️

ずっとこばこ❤️とおまんこを穿られる度に大きく鳴いて、声をあげて感じまくってだらしない顔をしちゃつてる❤️

そこにはもう、『真尋さま』なんて存在はいなくているのは——。

「ぐつお❤️ 締め付け、えぐっ……っ❤️ 出来損ないの変態マゾ女に、ザーメン出してあげる、からねえ❤️」

「はい！おじさまの、貴重なザーメン！出来損ないのおまんこにお恵み下さい！」んああああ

——出来損ないのマゾ女

おじさまのザーメンを恵んで貰って生きてるチンポ乞食

チンポがビクビク震えてあっついザーメンをおまんこの奥に注がれる感覚にクラクラしてきちゃう

メスとしての快感に震えて、だらしない顔を晒してしまう。

.....。

.....。

.....。

「それでは……おじさま！ 今日もありがとうございました！」

エッチをして貰って帰る際は深々と全裸で土下座がルール

おじさまに撫でるみたいに頭を踏んで貰っておしまい。

名残惜しさもあるけど、また明日も可愛がって貰おうって気持ちがキュンキュンわいてくる

何回も出したおちんちんもピコピコ震えていて、もう一回おねだりしちゃいたい気持ちもあるけどそこは我慢！

「そういえばさあ」

「はい？」

ご挨拶を終えて頭を上げ、服を身に着けていたころ、タバコを吸うおじさまが話しかけてきた。

何かあったかなと首を捻っていたら、おじさまはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて——。

「真尋ちゃんってあのお嬢様学校通ってるんだよねえ ❤」

「は……はい、そうです、けど……」

「今度お友達紹介してよお……ね？」

「！！」

——お友達を紹介して。

他の女も抱きたい、抱かせろと言うおじさまの言葉。

もしそれを始めてしまったら、アタシの生活の全ては崩壊すると思う ❤

学校での立場も何もかも失うときが来る ❤

でも、もう A V に出てエロ配信までしているアタシには今更の話 ❤

だから、アタシは躊躇いなく頷いて、ペロリと舌なめずり ❤

今のアタシの姿を見たら、玩具たちはどうなる、かな？

なんて考えて——。

「はい❤ とびっきりカワイイ娘をご紹介しますね？」

——なんて答えちゃった❤

.....。

.....。

.....。

.....。

「ご主人様あ❤ 今度は私に入れて下さい❤」

「ああん❤ 次は私の約束ですよね？」

「はあー❤ はー、イキ過ぎて……腰が……❤」

「んひひひ❤ 順番にしてあげるからねえ？」

聞こえてくる玩具……じゃなくて『ペット様』たちの声と『ご主人様の』声。

媚びたような、ううん、媚び切った声を聞きながらアタシは——。

「ふぐううううううう ❤️ ❤️ も、もう、無理れひゅううう ❤️ 出ないっ ❤️ これ以上は痛いんれすううう
❤️ お許しくださいいい ❤️」

「あははは★ 情けない顔 ❤️」

「ねー、あと 10 回イカせたら死ぬかなーこの豚 ❤️」

「じゅ、10 回なんて、無理いいっ ❤️」

——かつて、玩具と呼んでいた女の子、今ではご主人様の大切なペット様 ❤️ たちに虐めて頂いています

❤️

手足を縛られて身動きできない状態でバイブでおまんこ、電マ 2 本でおちんちんを刺激されて、もう 7 回目の射精 ❤️

薄くてカウパーみたいな精液を漏らして身体をガクガク震わせるアタシのおちんちんに容赦なく責めが続けられていく。

今ではアタシはもうこんな立場 ❤️

おじさまに抱いてもらう順番待ちのペット様に遊んで貰うだけの、使い捨ての玩具、それが今のアタシ ❤️

「こんなのがヤリチン気取ってたんだから笑えるね～、ね、まひろさま？」

「も、もうしあけ、ごじやいま、せん……❤ 雜魚おちんちんの出来損ない如きが、はあはあ、自分を偽
つていて、ほ、ほんとうに反省、していますっ……❤」

ペット様に笑われながら必死に謝罪をしておじさま、ご主人様を見るとアタシをニヤニヤ見ている❤

ああ、今はもうそれだけで良い❤

おじさまに見て貰えるだけで気持ち良い❤

でも、久しぶりにチンポ❤ 欲しい❤

そう思ってた頃にご主人様が立ち上がってアタシの方に来てくれた❤

「久しぶりに便器のおまんこ使おうかなあ❤」

「あ、ああ❤ あ❤ ありがとうございますっ❤」

ご主人様の言葉にアタシは歓喜して周りは「えー！ こんな豚にもったいない……」「私の方が気持ち良い
ですよ？」なんてアピールしている。

アタシはそれを聞きつつ、さっきまでイキ過ぎて萎えていたおちんちんをピコピコ揺らしておじさまのチ
ンポ待ち❤

太くて素敵なおちんちん❤ 今はもうそれがアタシの全て❤

周りから見下されながら、笑われて蔑まれながらおちんちんに媚びていくだけ❤

アタシが必死に作った蟻で固めた鳥の羽根は本物のオチンポ様の前にあっさり溶けちゃった❤

無謀にも飛ぼうとしたアタシはしっかり地面に、地の底まで落ちたんだけど……❤

今は幸せ……❤️❤️

HAPPY end